

「巻き込まれ親父の子守唄」

作 藤次郎政秀

●プロローグ

Y 国際港でのフェリー乗っ取り事件以降、芸能事務所〇×エージェンシー社長のMKの信用を得た碇屋は、その後度々所属事務所のアイドルやタレント達の警護任務の依頼を受けていた。特に人気歌手のIMは、本人から直接警護依頼をしてくる程：フェリー乗っ取り事件ではHYを任務に推薦したが、次の依頼から年齢が近いIYを任務に就かせることにした。

人気歌手IMとIYの相性は良く、任務外のプライベートでも頻繁にショッピングとか一緒に行動していて、過激な記事で有名な写真週刊誌にIYの写真が「人気歌手IM、LGBTQ疑惑？人気歌手IMの居る所に必ず居る謎の女性！」とか銘打って掲載されていたりする：芸能事務所側はIYを「IMのボディガード兼セカンドマネージャー」と説明しているのです、テレビのワイドショーでも特段取り上げていなかった。

その写真週刊誌を堂々と白山亭のマガジンボックスに入れていたら、IYがHGに「准尉！やめてください！！」と、凄じ剣幕で抗議してきた。

TY、HYはIYを羨ましく思っていた。

その内、その芸能事務所の他に皇王家の方々：特にO県領地海軍基地のAT中佐の口利きで、皇族であるO県領地の知事OT殿下が帝都に来た時には必ずTYに警護依頼指名が来るようになった。これには、TYの実家の存在とTYが皇王から佩刀の許可を貰っていると言う事がある。

HGは「ヤバイ！人手が足りない：」とうれしい悲鳴を上げるようになった。

● 白山亭

「また、あの人來てるわよ」

白山亭の女給達がひそひそと話す。それは昼に決まってくるある男の客についてである。

男は白山亭のY国際港駅が見える入り口側のカウンター席に必ず陣取り、コーヒーと軽食を注文する。

男の正体は皆知っている。彼は港町水上警察署の捜査員K J。先の港のフェリー乗っ取り事件でH G達と作戦（連絡要員）を行った人である。

K Jは最初、任務で駅に出入りする人を貼り込んでいると思われたが、なにかそわそわして店内を見回したりして様子がおかしい…やがてその理由が判明した。K Jの目的はI Yである。それが分かってから、白山亭の女給達は、I Yが勤務時間でもない時でも裏（碓屋）からわざわざI Yを呼び出すほどI YとK Jの仲を取り持とうとした。

やがてI Yが女給姿になって、「I Y、入りまーす」と言って、バーカウンター横の通用品のドアを開け、スカートの端を軽くつまんで会釈をして白山亭の裏口から入ってくると、早速他の女給達に捕まり、水とお絞りと注文伝票の乗ったトレイを渡され、送り出される。I Yは仕方なくK Jの席に行き、

「いらっしやいませ。ご注文は？」

と懇慫に應對する。

「ああ…オリジナルコーヒーとミックスサンドイッチを…」

I Yの女給姿を見たK Jは嬉しそうに注文するが、

「はい、畏まりました」

I Yは素気なく注文を受ける。そして、カウンターに戻ると「T Tさん、オリジナルコーヒーとミックスサンドイッチ…」と注文を繰り返す。それを受けたT Tは、

「あら…もう少しお話したらあー、フロア責任者としてはおねえさん許可するけど」

「いいえ…仕事中はお客様と私語は必要最低限…それにウチは『サンドイッチ』ではなく、『サンドウィッチ』です。オーナー（HG）がそう決めたので…」

「あら、冷たいのね。でも、お客様との私語については、そんな決まり、准尉は言っていないわよ（女給喫茶なので、お客との雑談を楽しむ場として、むしろ奨励している。作者注）」

「いいんです！最近チョットしつこいので」

IYは少し怒っているように言った。彼女はKJについて気に入らないようだ。

「どうしたの？」

「この前の休みの日に、買い物に行こうと母屋の門から出たら、突然声を掛けられて…『やあ、偶然だねえ…』なんて…あれ、絶対ストーカーですよ。あの人の勤め先（港町水上警察署）じゃなくて、港町警察署に相談に行こうかと…あれ、絶対私ではなくてIM目当てなんだわ！」

「えっ、そこまでする必要はないんじゃないかなあ…」

TTはIYの気迫にタジタジになった。

●童話「狼と狐」

遠いお山の中の森に一匹の狐の子が居ました。その狐の子は真っ白な毛並みで遠くからもよく見えます。

狐の子が遠くから見えてしまうことは、その子にとっては大変なことで獲物を捕らえようと近づくと、獲物からは狐の子が森の緑より白い毛並みが目立ってしまい、逃げられてしまいます。

白い毛並みの為に他の兄弟から仲間外れにされ、獲物も満足に獲れないので、とうとう親からも見捨てられてしまいました。

狐の子は親や兄弟ともはぐれて森の中でお腹を空かせて迷っていました。

空腹のあまり、とうとう動けなくなっていました。

「…もう、死んじやうのかな？お父さんもお母さんも、兄弟たちもわたしを置いていなくなっちゃったし…この白い毛のせいで獲物は逃げてっちゃうし…わたし役に立たないし…死んじやうのかなあ…嗚呼、もうどこでもいいかあ…」

狐の子はなげやりになって、その場に倒れ込んでしまいました。

「暖かいな…まるでお父さんの横に居るような…そっか、わたし死んじやったんだ！」

と狐の子は目を開けると、灰色のゴワゴワした毛が見えました。

「ここは…」

「おっ、気が付いたか」

その声に驚いて狐の子が見上げると、年老いた狼が寄り添うように座っていました。

狐の子は驚きます。

「なんで…どうして…わたし狼さんに食べられちゃうの？」

狼は動揺している狐の子を見て舌なめずりをして

「うーん、それもいいかも…」

「えっ！」

「だって、お前さん『死んじやいたい』と言っていたよね。それならここに居る年老いた狼の餌になってもらおうか」

年老いた狼の言葉に狐の子は慌て出す。

「狼さん、たっ、助けてください！まだ死にたくないです！！」

「本音が出たね」

狼は笑うと、狐の子の前に雉を置きました。

「まあ…食べなよ。こんなガリガリの小さな狐食べてもおいしくない」

年老いた狼は笑って言った。

「狼さんありがとうございます。このお礼はきつとします」

と狐の子は出された雉を夢中になって食べ始めました。

その間、年老いた狼は狐の子をじつと見ていました。時々狐の子は狼を見上げますが、狼は目を細めて狐の子が雉を食べるのを見ているだけでした。

「嗚呼、美味しかった。狼さんありがとうございます」

狐の子は満足して狼にお礼を言いました。「(そして、次はわたしの番ね…)」と狼に食べられる覚悟を決めました。

「それだけ元気があれば、まだ生きていけるだろう…行きなさい、白い狐の子」

狼は立ち上がると、颯爽と歩きだしました。

「…なんで？」

狐の子は、てっきり自分が食べられるのを覚悟したのに、自分を置いて去ろうとしている年老いた狼に驚いていた。

「狼さん、なんでわたしを食べないの？」

それを聞いて年老いた狼は

「俺はさつき腹一杯食べているからね。お前さんを食べる気にはならなかったって事だ」

「わたしを置いていかないで」

「ついてきたら、本当にお前さんを食べてしまうかもしれんよ」

「それでもいいです。わたしを連れて行ってください」

「やれやれ…仕方がない、勝手にしなさい」

「勝手にします」

狐の子は年老いた狼の後をついていきました。

「どうして、狼さんは独りなのですか？」

「俺は昔、家族と一緒に行動していたんだ。その間に妻と子が居たが妻が先立ち、子も独り立ちし群れを率いるようになり、俺は年老いて狩りの足を引っ張るようになったので、群れを離れたのさ…もうこの歳だ、いつ妻の元に行ってもおかしくない」

「どうして、わたしを助けたんですか？」

「お前さんのその白い毛並みだと、餌が取りづらいだろう？」

「はい」

「昔お前の様に白い毛並みの子供が居たんだ」

「その子供もなかなか餌が取れず、いつもお腹を空かしていたよ」

「狼は、家族で行動するのでね、子供が大きくなっても群れに居ることが多いので、俺達が協力して獲物を取ってはその子に与えていたんだ」

「それで、その子はどうなったのですか？」

「結局、白い毛並みが仇になって若くして猟師に撃たれて死んでしまった」

「…」

「それで、俺はお前さんを見て、死んだ子供の事を思い出して、その白い毛並みではさぞかし苦労していると思ってな」

「そうですか…」

「俺はお前さんに、その白い毛並みでも獲物をとる術を教えようと思った。おせっかいだと

思ったら、ここから去りなさい」

「いいえ、狼さん。教えて下さい！わたしこれから狼さんを『師匠』と呼びます」

「よろしい…ようやく生き延びる気になったようだね…ついてきなさい」

「はい」

狼は白い狐を連れて獲物の居る場所に行き、いきなり狩るのではなく、今までどうやって失敗したかを思い出させました。狐が狩りに失敗した理由を次々に狼に話します。狼はそれをいちいち否定しないで聞いています。狐が狩りに失敗した理由が尽きると、狼は「まだまだあるんじゃないか？」と狐に促します。狐は頭が沸騰しそうな気分になりながら、狼に話し続けます。一度話した言ったことも何度も狼に話したような気がします。

その内、狐は目眩がして倒れてしまいました。

狼は狐に寄り添うように座ると、黙って狐を見ていました。

やがて気が付いた狐は、隣に狼が居ることに安心しました。

「気が付いたね、お前さん狩りに失敗した理由を話してもらったが、その理由の一つ『自分の毛並みが白い』と言う事しか話してないよ…『白いからくが上手く行かない』とか、しまいは『白いからくがダメなんだ』とか…」

それを聞いて狐はハタと気が付きました。

「わたしは『白い毛並み』が狩りが出来ないと思いついていいると言う事だけですか？」

「…そう、その『白い毛並み』だけと言う思い込みが、もっと他にもできる事があるのに、できない理由にしてあきらめている」

「…」

「では、『白い毛並み』が、優位に狩りが出来る方法を考えてくらん」

「…そうですね。雪の中ではよく獲物が捕れますね。それから、魚を捕る場合も雲を背にすれば…」

狐は狼に「白い毛並み」が幸いして獲物にありつけた話をしました。その内、狐は今まで失敗した狩りでも「白い毛並み」を優位に使うことで獲物を狩る事ができるかも知れないと考えました。そのことを狼に告げると。

「そうだ、よく思いついた…俺は賢い奴は好きだよ」
と言つて、目を細めた。

その晩、妙に目が冴えて眠れない狐は傍らで眠っている狼を置いて、狩りに出かけて、見事獲物を仕留めました。

狐が仕留めた獲物を啜え意気揚々として狼の所へ戻ると、狼は起きていました。

「…やあ、狩りは成功したようだね」

「はい、昼間狼さんと話をしていて、ふと狩りの仕方について思いついたので試してきました」

「そうかい…それはよかった」

「この餌は狼さんの教えのお礼です。食べてください」

「そうかい、ありがとうございます」

次の日も、また次の日も年老いた狼は狐に狩りの失敗と成功の体験について話をさせました。その中で狐が気づいた事を狼に話すと、狼は狐の言う事を全部否定しないで受け止め、いくつかの質問をしていきます。狐が否定的な事を言う、狼は「それはどういう事？」と聞き返してきます。そうして、狐は目の前に居るのが狼ではなくて自分自身を相手に話をしているような気分がしました。

そうやって、狼は狐に自身の過去の狩りについて教えるのではなく、狐自身に狩りの方法を考えさせました。

そうして、いくつもの冬を越して痩せた子狐はやがて立派な狐になりました。

大人になった白い狐はいつものように上手に独り狩りをして、師匠の年老いた狼の所に戻ると、狼は餌を啗えた狐を見て、

「それでいい…もう一人前の狐になったね。俺は満足だ…後はお前さん一人でもやっていける。ここから立ち去りなさい…そして恋をして子供を産み育てなさい…それが、俺が望んでいるお前さんの未来だ」

と言って、年老いた狼は息絶えました。

「師匠！」

狐は啗えた餌を落とすと、年老いた狼の所に行き、

「師匠、起きてください！目を開けてください！いままでみたいにわたしの話を聞いてください！」

と言って、鼻で狼の鼻をつつくが狼は動きませんでした。

白い狐は慟哭しました。

「師匠…ありがとうございます。今のわたしはこのとおり一人で餌が取れるようになりました。狐と狼という種族がなければ、わたしはあなたの子供になれたかもしれません。これから、師匠の教えに従い暮らしていきます。そしてあなたが望んだようにこれから恋をして子供をつくり育てて行きます。そして子供たちに師匠の話をします」

「…これ、私だ…」

I YはH Gの書斎から何気なく持ってきた童話の絵本を読んで、白い毛並みの狐が自分で、年老いた狼がH Gとダブった。

●指名依頼

白山亭の入り口前に珍しく黒いリムジンが停車する。運転手が車を降りて後部のドアを開けると、車内から明らかに秘書と思われる女性と立派な身なりの紳士が降りて来た。

「いらっしやいませ」

白山亭に入り、応対する女給に女性が

「失礼ですが、少々お尋ねします」

「はい、何でしょうか？」

「碓屋社長のH G様はいらっしやいますでしょうか？」

「社長ですね。ご予約は？」

「帝都から来ましたB侯爵家の者とお伝えください」

「わかりました。こちらでお待ちください」

と言って女給は店の奥の席に案内し、バーカウンターに行った。そして、バーカウンターでフロアスタッフ姿のT Tに女性と紳士の来店目的を話していた。T Tは内線電話をかけ、女給は席に戻り

「お飲み物は、いかがでしょうか？」

と言って、メニューを広げて提示した。女性は隣に座っている男性と話をし、

「それでは、白山亭オリジナルコーヒーを2つ」

「はい、畏まりました。社長はじき参りますので、お待ちください」
と言って女給は下がる。

やがてバーカウンターの奥からスーツを着てH Gが出てきた。先程応対した女給の案内で席まで来ると

「どうも、碓屋社長のH Gです。わざわざお越しいただきましてありがとうございます」

「B 侯爵家当主Aです。H Gさん直接顔を合わせるのは初めてですね」

「そうですね」

お互いにこやかに挨拶をした。

H GはH Yの一件〔巻き込まれ親父の膠着〕参照〕以来、自分の弟子のT Y、I Y、I Aの両親達と話をして、H Gの所に居るのに親の許可を得ている事を確認していた。T Yの実家は古くから皇王家に仕える軍人の一族、I Aの実家は運送会社、I Yの実家は貴族階級の家で、父親はいまH Gの目の前にいるB 侯爵…

「あれ（I Y）は元気ですか？」

「はい、今裏の工場で友人に工作機械の操作を習っています」

「ほう…あれが機械操作ですか…」迷惑をおかけしていませんか？」

「いえいえ…教えている友人の話ですが、なかなか筋が良いとの事です」

「失礼、ご友人と言うのは？」

「あつ、私の軍時代からの親友です。軍に居た頃から二人でガンスミスを生業にすることが夢でしたので…」

「ああ、そうですか。夢が実現できて嬉しいですね」

B 侯爵は微笑んだ。そこにカウンターからコーヒーが運ばれてきた。

「お嬢さん呼びますか？」

「いえ、結構！今の私はなるべくあれと会いたくない…あれも同じことを考えている事でしょう」

「そのお嬢さんの居るここには、どういったご用件でしょうか？」

H Gは世間話をそこそこ打ち切り、本題に入った。

「そうですね。ビジネスの話をしましょう」

「こちらでよろしいですか？なんなら別の個室を用意いたしますが…（H Gは、最近流行りのリモートワーク用として、白山亭の建物の3階部分にあった娼館を全面改装し、防音壁を備えた貸会議室や個室を整備した）」

と言うと、B 侯爵は手を挙げて、H Gの申し出を制して

「いえ、ここでよいです」

「では、ご用件を伺いましょう」

H Gは数日前、B 侯爵家から『特別に御社に依頼したい事がある』との連絡を受けていた。

H Gはてっきり、B 侯爵家に呼び出されるものと思ったが、こっち（白山亭）に来るとの事。

また使いが要件を伝えに来るのかと思ったが、B 侯爵家当主が自ら来た。

「実は、当家次期当主Cの事です…」

「はい」

「最近、学校で学内抗争に巻き込まれているようで…」

「そうですか」

「悪い連中と付き合っているとの噂とか、殺人予告が当家に来たりしているのです」

「なるほど…ちなみに、ご子息はおいくつですか？」

「あれから聞いていませんか？」

「はい…詳しくは」

「そうですか、Cは17歳…現在高校生です。あれの10歳…年下ですか」

「お嬢さんは、現在25歳ですよ」

「おっと、そうでしたか…父親として娘の年齢に無頓着と言うのは…お恥ずかしい」

B侯爵は笑って言った。

「そこでHGさんに依頼したい事は、Cの妹のKの警護をあれにお願いしたい」

「えっ、次期当主のCさんではなく？」

「はい、Cは今全寮制の高校に居ます…ですので、Cの事は今国家公安局に相談してそちらに対策をお願いしています。一方妹のKは次期当主候補でもなく、あの子もあれと同じく庶子なもので…お恥ずかしながら長男のCの通う全寮制高校校内での影響があの子にも及ぼされてきているのです。世間体ではCは重要でも、Kについては一族の者でも関心がないのです…ですが、当家の…私の子であることは確かなことであるので、ならば姉のあれに警護をお願いしようかと」

「…成程。ご指名ですか」

「はい」

「私といたしましては、このご依頼ビジネスとしてお受けしたいと思います。ご指名のお嬢さんがなんと云うか…」

「そこをなんとか説得していただけませんでしょうか？」

「一応、話してみます」

「なにとぞ、よろしくお願いいたします」

と言って、B侯爵は頭を下げた

「あつ、頭をお上げください…なぜ、侯爵様はお嬢さんに妹さんに当たる方の警護を依頼したのか、差し支えなければ教えていただけますでしょうか？」

「はい、実はKが当家に来たのはつい最近で、あれが家を出た後です。それまではKの実家

「J伯爵家に居たのです」

「ほう」

「Kは、あれが当家に来る前に当家で生まれました。Kの母親がJ伯爵家所縁の人で私の最初の妻でした」

「はい…」

「後に皇王家から、正妻にと降嫁した女性を娶り、Cが生まれましたが、同時にKが生まれました。Kを母親と共にJ伯爵家に戻し、その後私はあれを引き取ったので、あれとKは面識がありません」

「スミマセン、侯爵様…」

「なんですか」

「お嬢さんとCさんとKさんの兄弟の順位が分からなくなりました」

「そうですか…あれ（IY）が長女です。Cが長男で2番目です。Kは次女で3番目ですが、CとKは同学年です」

「そうですか（苦笑い）、それとKさんの母親はJ伯爵様所縁とお話ですが、どうして『庶子』のですか？J伯爵家なら、『庶子』とは言わないのでは？」

「HGさん、博識がおありですね。そうです、J伯爵家所縁と言いつても、正確にはKの母親は当家との政略結婚のためにJ伯爵家に庶民から養子に入った女性です…このことは内密に願います」

「言いづらい事を話していただき、ありがとうございます。内密の件、弊社守秘義務がありますのでご安心を」

「できれば、あれにも黙っていて欲しいです」

「分かりました…ただし、お嬢さんが警護任務に入りましたら自然に知ってしまうと思います…その時にご容赦を」

H GはB侯爵を試すような目で話すと、B侯爵は平然として

「いいでしょう」

B侯爵はコーヒーを口にすると、「美味しいコーヒーですね」と褒めたので、H Gは「ありがとうございます。当店創業時からの自慢のオリジナルコーヒーです」と紹介した。

「話が横道にそれましたが…私があれに妹のKの警護を依頼するのは、K自身の為なのです」

「？」

「私があれを大学卒業したのを期に家から出しました。いずれKもそうせざるをないでしょう…ですので、私はKに姉のあれを会わせておきたいのと、あれから何か学ぶことがあると思い、今回あれを指名してKの警護を依頼した次第です」

「…そうでしたか、なかなか思慮深い。侯爵様も娘想いですね」

「そうですかね…私はあれを放逐するようにして家を追い出した張本人ですが…」

「…そうですね…彼女はその事でかなりナーバスになり、一時死ぬことだけを考えていたそうです」

「…エッ、それは本当ですか？」

「はい、たまたま私が旅行中に遭遇しましたF県領地での事件で、F県領地から脱出を試みている最中に前に居た民兵会社の社員達に遭遇しまして、その中に帝都の本部から派遣されてきた部隊の中にお嬢さんが居ました…ここまでは以前電話で話した事ですが、行動を共にしている最中に、お嬢さんから『死にたい』と言う話を聞きまして…」

「なんと…」

それまで静かに話をしていたB侯爵は驚いて、コーヒーカップを、音を立ててソーサーの上に置いた。

「現場でのお嬢さんの『死にたい』願望は、私の荒療治でなくなりました…おかげで、以前

電話でお話させていただきましたように、私の元に押しかけて弟子入りしてきました。その時に改めてお嬢さんから、『死にたいと思ったのは、実家を出されたところで生きる価値を見いだせなくなった』と打ち明けてくれました」

「…そつ、それは初めて伺いますが…」

B侯爵は狼狽した。

「はい…こういうことは、電話では話しづらいことですので、いずれ侯爵様と面と向かってお話をする機会があれば直にお伝えしようと伏せていました」

H GはB侯爵に対して謝るのでもなく、B侯爵を責めるのでもなく平然としていた。

「そうでしたか…H Gさん、私はもつと早くあなたと面と向かって話をすべきでした…娘を守っていただきました、この通り感謝いたします」

と言つてB侯爵は頭を下げた。H Gは慌てて

「侯爵様、頭を上げてください！」

B侯爵は、コーヒーを飲み干すと、秘書と共に立ち上がり

「それでは失礼します。あれが引き受けてくれたら連絡をください。詳細な打ち合わせをしましょう…それとコーヒー美味しかったです」

「そうですね…努力します」

B侯爵が店を出ていくと入れ違いに

「I Y、入りまーす」

と言って、いつもの様にバーカウンター横の通用口のドアを開け、スカートの端を軽くつまんで会釈をしてI Yが白山亭のフロアに入って来た。それを見てバーカウンターのT TはI Yの父親が来ていたことを告げようとしたが、H Gがバーカウンター越しに口に指を当てて怖い目をしていたので、T Tは黙った。

● I Y

その晩、夜間の P u b 営業の白山亭の隅の席（昼間 B 侯爵が座っていた席）に I Y を呼んで B 侯爵からの依頼を話した。それを聞いた I Y

「えっ、私が実家の警護任務ですか？」

「そう、B 侯爵直々のご指名だ」

「一体誰を？」

「B 侯爵家に居る女性 K さんの警護だ」

「准尉、K さんとは？」

「B 伯爵から、この方の警護を依頼された…」

H G は歯切れの悪い返事をした。H G は「お前の妹に当たる人だ！」と言いたいのだから、B 侯爵に口止めされているので、このように答えるしかなかった。

17

I Y は内心モヤモヤしていた。一杯飲むかと H G から勧められたシェリーグラスを見て
怯む

「どうした？」

H G が聞くと

「あのう…あの一件以来、どうもシェリー酒が苦手で…それも特に赤が…」

H G は「（何のこと？）」と思ったが、すぐに F 県領地の事件中に I Y に仮装させて斥候に出した時（「巻き込まれ親父の撤退」参照）のことを思い出し

「…ああ、そうか…あの一件がトラウマになっていたのか」

「あの時、准尉の愛銃と背広と買っていただいた服を汚してしまいました」

「あれは、大変だったなあ…」

「はい…おかげで今でもH Y先輩達に当時の写真を見せられてからかわれています」

「はは…そうかね」

「准尉、笑わないでください」

まだシェリー酒を飲んでも居ないのに、I Yは顔を赤くしてH Gに言った。

「ああ…ごめん、ごめん。でもいい勉強になっただろ？」

「はい。〃お酒はがぶ飲みするところくなことがない〃と…」

I Yがふざけて言うと、

「そっちかい！」

「アハハ！冗談ですよ」

屈託なく笑うI Yに「(こいつもH Y同様、笑顔が出るようになったなあ…)」としみじみと感じた。

「まあ、迷惑かけた俺の前だ、それを飲んでトラウマを克服しろ」

「F県領地の時もそうでしたが、ずいぶん、乱暴な対処療法ですね」

I Yは不満そうに言うが、笑っていた。

「そうだな、でもこれ(シェリー酒)が飲めないと、今回の依頼は出来ないだろ？ああいう家はこれを嗜む習慣があるそうじゃないか」

「はい、私も実家に居た頃よく飲みましたから…」

と言って、I Yはグラスのシェリー酒を飲んだ。

「…それで准尉、任務の件ですが、私はどうすればいいですか？」

「どうすればいいのか、考えてごらん？」

I YはH Gが自分を試すような顔をしたので、「(あつ、〃親父モード〃になった…)」と思った。と言う事は、H GはI Yがこの任務に就いてどう感じているかを話せば、今感じて

いるモヤモヤの正体が分かるし、解決策も分かる…I・YはH・Gに話し出す。

「私は、この任務について何か心の中にモヤモヤしているものを感じています」

「…モヤモヤとしているモノを感じている…」

「はい」

「それは、任務に就くことに関してかな？それともI・Yの実家についてのことかな？」

「多分、実家についての事だと思います」

「実家について、モヤモヤしているんだね」

「はい…警護任務自体は、前にもやっていますので、問題がないと思っています。確かに、指名を受けたのは嬉しいのですが、依頼先が私の実家で任務先も実家と言うのは…抵抗がありますね」

「うん…抵抗があるんだね」

「放逐された家になって、行きたくありません」

I・YはB侯爵邸を出て行った頃を思い出していた。

「そうだね…出て行った時のことを思い出したんだね」

「…はい」

「その時は、どんな気持ちだった？」

「あの時は、父上よりも義母上に対しての怒りが強かったです」

「義母上の方が…」

「はい、義母上は皇王家から降嫁して父上に嫁ぎました。私が父から実家に迎えられた時は、父上と義母上には既に男子の子供がいて、それが嫡男だったので、義母上が家の中で高慢になっっていたと思います」

「義母上の高慢さを気にしたんだね」

「はい、義母上は私に対して辛く当たり、私を何かにつけて『所詮庶子』と言っていました」

『庶子』と言われるのに腹が立ったんだね」

「私が庶子のため、家督は義母上の子の弟が継ぐと、以前父上から聞いていましたので、私は弟が居るのにあの家で私の存在する意味は何なんだろうと…」

「存在する意味は何なんだろう…」

「父上は、なぜわざわざB侯爵家と離れて街で母子つましく暮らしていた庶民の家庭から…母が癌で余命いくばくもない事は知っていましたが…私を引き取り、しかも既に家督を継ぐ弟まで居るのに、B侯爵家に住まわせているのだろう…なんで私が貴族の子供として教育を受けているのだろうと不思議に思っていました。私は父上を見て『私はB侯爵家を継ぐ器ではないな』と子供の頃から思っていましたので、私がB侯爵家に居る理由は、弟が何らかの理由で家督が継げない場合の予備にすぎないと考えようになりました。その後、弟が貴族や政治家の子弟が多く入学する学園に優秀な成績で入り、その聡明さを証明し、私が大学を無事卒業したのを機に私は家を出されて、役目が終わった事に、内心ホッとするのと同時に、父上から捨てられた感じが強くなりました」

「…役目が終わって、内心ホッとしたが、同時に捨てられたと感じたんだね」

「はい、その後は准尉がご存じの様に、わたしは死に場所を求めて民兵会社に入社しました。でも、私の『死にたい』と言う願望は准尉によって救われました」

「では、今はB侯爵家に対してどう思っているの？」

「義母上には、未だに蟠りがあり、許す気はありませんが、父上に対しては今まで私を育ててくれた恩と感謝の念がありますので、B侯爵家自体には恨みはありません」

と吹っ切れたように言うと、

「准尉も父上も私に依頼を受けてほしいのでしょうか？」

「まあ…俺の事はどうでもいい…お父上はお前さんに是非とも受けて欲しいのだそうだ」

「何か理由を聞いていますか？」

「弟君のC君が通っている学内でトラブルに巻き込まれているようだ」

「トラブル？」

「学内抗争としか聞いていないが、悪い連中と付き合っていると、殺人予告が送られて来ているのだそうだ」

「そうですか…Cが…」

IYは「ねえ様、ねえ様」と言つて、自分の後をついて回っていた小さい頃の弟のCを思い出していた。

「で…Kさんと言う人は？」

「その人については、弟君のC君と同年代の女性としか聞いていない」

「…そうですか、Cではなくて…」

「弟君のC君については、B侯爵は既に国家公安局に相談しているのだそうだ…次期当主だからだろう…それで、Kさんにも何かあるとB侯爵は考え、今回お前さんを指名しての警護依頼を頼んできた」

「…と言う事は、KさんはCの許嫁か何かですか？」

「うっ…うーん、一応、話しは聞いているが、お父上から口止めされている…それに理由については、任務中に知ることになるだろうと俺は思っている」

HGは口を濁した。

「…そうですか…任務中に知ることができますか…」

「うむ」

「分かりました、弟の許嫁の身を守るといふのであれば、姉の私が警護するのは当然です…私、この依頼受けます！」

IYは毅然として言った。HGは「そんなこと言っていないんだけど…変な使命感を煽っ

ちまったなあ」と複雑な心境になった。

「准尉、任務に就くにあたり、お願いがあります」

「…なんだ？」

「准尉の普段被っている帽子を貸していただけないでしょうか？」

「ん？なんで」

「准尉の身に着けているモノを貸していただけるのであれば、私は勇気が出ます…あのF県領地の事件での『赤ずきんちゃん作戦』の時の様に…」

「分かった」

H GはI Yが本当はF県領地の事件の時、H Gの愛銃を貸して貰った様に、この任務に就くのに勇気があるのだろうと思った。

●即バレ

I YがH Gの帽子を被りB侯爵亭を訪れ、使用人の出入りする門の前で呼び鈴を鳴らす。インターフォン越しに「碓屋から来ました、I Yと申します」と告げると、いきなり応対した人物の声が変わる。

「正面門からお入りください！お嬢様」

I Yはその声に聞き覚えがある…B侯爵家執事である。

「爺や、私は仕事で来たのであって、別に帰ってきたのではないわよ」

「はい、旦那様から承っておりますが…爺にはお嬢様はお嬢様です。使用人の出入り口を使わせる訳にはいきません。堂々と正門からお入り下さい」

暫くI YとB家執事との押し問答が続くが、I Yがキレて

「どうしても、ここを開けないのなら、この銃で鍵を打ち破ります！」

と言って、拳銃をスーツのジャケットの下に隠したフォルスターから抜くと

「構いません！その代わり『発砲許可申請』の事後申請はお嬢様ご自身で検察局に提出してください！」

と執事に叱られた。この時点でI Yは「（…負けた!）」と思い

「分かりました…正門に行きます」

と言つて拳銃をしまうと、意気消沈して正門に向かった。

I Yが正門に着くと、正門が開かれ数人の使用人と共に

「お嬢様、お帰りなさいませ」

B家執事が出迎える。

「（…だから…家に帰りたくなかったわ）」

とI Yは内心思った。

I Yはそのまま正面玄関に通される。そこでもまた使用人に出迎えられる。それを見たI Yは「（うわー）」と思い、これでは仕事に來たのか、帰つて來たのか分からなくなつてきた。

正面玄関に入り、執事に奥に通されるタイミングでB侯爵に出くわした。B侯爵はI Yを一別して、執事に対して

「おい、この人は私が依頼したKのボディーカーだ、なぜ正面玄関に居る」

「はい、旦那様…ただいまお…いや、I Y様に屋敷をご案内しておりました…」

と執事は誤魔化す。

「そんなことしなくとも、この人は知っているだろう…いいか、余計なもてなしはするな！」

「…はい、旦那様」

執事は頭を下げた。

その会話を聞いてI Yは「（やはり、父上は私を捨てたのですね…）」と悲しい気分になった。

その時、I Yの背後で正面玄関に車が付き、運転手が後部ドアを開けると、一人の女子高生が降りてきた。

女子高生は、玄関に居るI Yの姿を見つけると

「爺や、この人だあれ？」

「これはお嬢様、お帰りなさいませ。このお方は、I Y様と申しまして、お嬢様の…」

と言ったところで、I Yは「弟のCと同じ年の女の子…この子が警護対象のKさん？」
と思ひ、自分の身分を隠そうとして

「…っこれ、爺！」

とつい言つてI Yは執事の言葉を制した。しかし、B Kは抜け目なく、

「今『爺』と言った…この家の人？」

と聞かれたので執事はニコニコして、

「はい、お嬢様…このお方はKお嬢様の実の姉上様に当たるお人です」

とI Yを紹介した。I Yは執事が『お嬢様の実の姉上様に当たるお人』と言ったのを聞いて
「(折角、身分をかくそうとしたのに…)」と、台無しにされて執事を睨む。

「…姉上様？」

B Kが言うと、I Yはハタと「確か、今『K』と言ったわね…姉上様…って、この子C
の許嫁じゃなくて、私の妹？きいてないよー！」と驚いた。

● 姉上様

「はっ…初めまして、I Yと申します。Kお嬢様」

「はい、初めまして姉上様」

と言つて、B Kはスカートの端を持って挨拶した。それに対して会釈をするI Y

「姉上様？」

もう正体がバレてしまったので「もうどうにでもなれ…」と

「はい」

「姉上様は、どこかに嫁がれたのですか？ 姓が違う様ですが？」

それを聞いて、I Yは「（えー、私結婚して家を出た事にされているのー）」とパニックになった。

「いえいえ…そうではありません。Kお嬢様。Yお嬢様は、家督を継ぐのを放棄され、家を出たのですよ」

I Yは執事の言葉に我に返り「（ものは言いよう…ね）」と思った。

「あら…そう…姉上様、初めまして妹のKです。よろしくお願いします」

「はっ、はい…Yです。よろしくね」

「はい、姉上様」

と言って、Kはニツコリ笑った。それを見たI Y…なにか胸を射抜かれた感触がした。

「…あちゃー」

実家に帰って、いきなり知らない妹が出来て、それが警護対象と言う事と共に相手に自分の正体を知られてしまった。「（准尉！なんで話してくれなかったのですかー！）」I Yの怒りの矛先が執事からH Gに変わり、持っていたH Gの帽子を思わず握りつぶす。（その頃、H Gは白山亭店内で大きなくしゃみをしたとかしないとか…作者注）

玄関にある大時計が鳴る。

「おっと、ティータイムの時間です。お嬢様方、これからのお話はテイルルームで…」

「はい、行きましょ姉上様」

B KはI Yの手を引っ張る

「…」

初対面でいきなり妹に懷かれてしまった。

ティールームでの午後のティータイム…席には当然I Yの義理の母であるB 侯爵夫人が同席する。B 侯爵夫人はI Yを一瞥して

「I Y…お久しぶり」

「ご無沙汰しております奥様」

慇懃に挨拶する義理の母に対して、I Yは動じることなく挨拶をした。I Yに取ってはこの義母の冷たい態度は、皇王家から降嫁したというプライドと、嫡男であるCの母親という立場から庶子であるI Yに対してここに居た頃から風当たりが強い。I YもB 侯爵夫人を今では義母とすら思っていないので、B 侯爵夫人を敢えて「奥様」と呼んだ。

Kが席に着く、I Yが彼女のサポートをして、そのまま後ろ歩きに下がり、後ろに控えた。Kは振り返り、

「えー、姉上様も…」

「駄目です！K」

B 侯爵夫人はB Kを叱った。B Kは言いかけていた言葉を引っ込め、項垂れた。

「そうですね…私は既にこの家の者ではありません。お嬢様の警護を引き受けた者です。席にはつきません」

B Kの後ろに直立したままI Yが優しく諭す。

「…そんなぁ…嫌だぁ…折角姉上と名乗る人にお目にかかったのに…」

「爺」

「はい、奥様」

「あんた、I Yの事を…」

「申し訳ありません…奥様。ですが…」

「黙りなさい！」

「はい」

執事はB侯爵夫人の剣幕に二の句を告げなくなってしまった。

「K…よく聞きなさい、あなたの兄上Cが今いる全寮制の学内で学内派閥の抗争に巻き込まれているのは存じ上げていますね」

「はい…義母上」

「そのため、Cには脅迫状…果てには殺人予告まで来ているそうです」

「…」

「ですので、K、あなたに危害が及ばないように、叔父上（O県領地知事O T）の紹介でエージェント会社から警護を任務とする方をよこして貰いました。その方がたまたま当家に縁のある人と言う事です…ですので、この方はあなたの『姉上』ではありません」

…これは、B侯爵がI YをB Kの警護任務につけるため、H Gの事を調査している時に、たまたまH Gの顧客にO県領地知事O Tが居たのを利用してB侯爵夫人に説明しているため。

「（…そこまで言う…）」

I YはB侯爵夫人の言葉に腹が立った。

「さて…茶番はやめて、本日はKの身辺警護をお願いするエージェントの方がいらっしやいましたので、紹介するわ」

と言って、B侯爵夫人は扇を持った手でI Yを指す。

「改めまして、自己紹介をさせていただきます。エージェント会社『碇屋』のエージェント、I Yと申します。この度は当社のサービスを御利用いただきまして誠にありがとうございます」

と言って、I Yは使用人の挨拶をした。I Yはどうに家を捨てているので、この扱いを受けなくても別に何も感じなかった。

「I Y、この子が、あなたが今日から警護する娘のKです…K、ご挨拶なさい」

「Kです…改めて初めまして…I Yさん」

B Kは泣きそうな顔をして、I Yに挨拶する。I Yは「この子も今の私を見て、いつか自分もこうなると感じたのね…それにしても義母上も酷な事を…それにしても、この妹が最後の一人とは、私には思えない…この先、第二第三の妹か弟…いや、姉・兄が出て来るかもしれない…」と思った。

本来、賑やかな語らいの場であるティータイムが静まり返った通夜の様になった。

●なんてこった！

ティールームから出て、Kの部屋に行く。部屋で制服から私服に着替えるB KをI Yは世話をする。そして、I YはB侯爵家から支給された侍女の服に着替える。

「Kお嬢様は…」

「姉上様、そんな言い方しないで、『K』と呼んでください」

「いいえ、そうはいきません…私はお嬢様の警護を請け負っている者と思召し下さい」

「そんなぁ…」

上目づかいで言うKにI Yは困ってしました。先輩であるH Yの上目遣いは自分の要求を叶えるために多用される（その他、低身長の為自然とそうなるのと、H Yが実は近眼で、

コンタクトレンズ入れていない場合にも使われる」が、実の妹のおねだりの上目遣いは破壊力があると改めて認識した。…きつと、HGやTTも同じ気分になると勝手に思った。

「仕方ありません。この部屋の中では私を『姉上』と呼んでもいいでしょう…でも、この部屋を出たのなら、私を『IY』とお呼びくださいませ…父上の手前もありますので」

「うーん、仕方ありませんねえ…父上、義母上の手前、そうしないと姉上様が叱られてしまいますし、私も叱られてしまいます」

「ご理解いただき、ありがとうございます」

「でも、この部屋では『姉上様』と呼んでいいのですね…では、姉上様、ここでは私の事を『K』と呼び捨てにしてくださいませ」

「はい、Kお嬢…じゃなくて、『K…ちゃん』…でよろしいですか？」

「…もう、姉上様！そんなよそよそしい言葉使いもここではしないでください。『Kちゃん』でいいです。私も『姉上様』と呼ばせてもらいます」

「それで、よろしいですか」

「もう…姉上様…それ（敬語）やめて」

「すみません…この言葉遣いはここ（B侯爵邸）で身につけた言葉遣いなので、直ぐには直りません。Kちゃん」

IYとKはお互い笑った。

BKが宿題をしている間、IYはBK専属侍女であるGOからBKの日常のスケジュール等や嗜好等の話を聞き、頭に入れる。明日から任務が完了する間（BKの兄BCの問題が解決するまで）、「GOは実家に用事があるとの事で、一時的に暇を出されている」との裏口合わせをした。

夕食はB Kの食事の間はB Kの後ろで控え、その後も入浴の世話をして、ようやくB 侯爵邸の使用人の食堂で自分の夕食を摂る。I YがB 侯爵の実の娘であることから何かと周囲から気遣いが払われるが、I Yは「私は、B 侯爵家を捨てた身ですのでお気遣い無用です」と宣言する。しかし、執事は元より本来B 侯爵夫人側の立場である家政婦（家政婦は女性使用人の長で女主人のB 侯爵夫人側につきまます。作者注）までも「Yお嬢様は黙って居てください！」と気遣われる羽目に…

「（私がここに居た頃、私の専属侍女のE Sは、ずっとこうしていたんだ…苦勞させたのね…）」と改めて自分が侍女の立場になって、かつて我儘を言って困らせた専属侍女の事を想い、同時にすまないと心の中で詫びた。

夜寝る前にB Kの部屋で話をする。明日からの打ち合わせをして、B Kをベッドに寝かせると、

「姉上様は、普段仕事以外の時は何をなさっているの？」
とB Kが訊ねてきた。

「私は、任務以外は、准尉…じゃなくて社長の経営する喫茶店…“白山亭”と言って、その女給…じゃなくて、ウェイトレスをしていますね…あと、同じく社長の経営するガンスミスで働いていますね」

「姉上様は、そんなに働いているのですね。そんなに働いて大変じゃないのですか？遊びに行ったりしなのですか？」

心配顔のB KにI Yは笑って、
「言い方がおかしかったですね。…Kちゃんの警護任務の様なエージェント任務がない時の仕事は、ウェイトレスやガンスミスの仕事をしています。…ちゃんと休みもありますよ」

「姉上様、『ガンスミス』ってどんな仕事ですか？」

『『ガンスミス』と言うのは、そーですね…何というか…鉄砲のメンテナンスや調整をする仕事です』

「…鉄砲？あのテレビで見る？」

「そうです」

「えー、あんな危険なモノ使うのですか？」

「危険ですね。でも、実際にはテレビの様にあんなにバンバンと撃ちません。専ら組手（こちらの世界でいう空手のようなもの）とか体術（こちらの世界で言う柔術のようなもの）を使いますね。でも、いざと言うときは鉄砲を使います。実際には鉄砲も機械ですので、分解して掃除したり、壊れた部品を交換したりします。当然、直ったかどうかを確認するために、撃つこともあります。警護任務では、鉄砲を使う事もあるので、今でもここ（と言って、侍女服のスカートを軽く叩いて…）（わざとです。実際にはありません。今はボーチに入れていきます。作者注）に持っています」

「姉上様、見せて」

「駄目です！」

「えー」

「あなたが目にしたり、触ったりするものではありません。私が鉄砲を使うときは、Kちゃん（あなた）の命が危険になった時です」

「…そうなの？」

「そうならない様にするのも、私の仕事です」

と言ったIY「これでいいんですっけ？准尉…」と自分の話に若干自信がもてないIYは部屋の帽子掛けに掛かっているクタクタになっているHGから借りた帽子に語りかけた。

「じゃあ姉上様、お休みの時は？」

「それは…いつもは本（それも大抵、H Gの持っている漫画や銃器の本やマニュアル（笑））を読んでいたり、テレビ（それも、ニュースやドキュメント番組中心）やビデオを見たり、警察署の道場で組手や体術の稽古とか、射撃場で銃…鉄砲撃っていたり…、機動隊の訓練施設でB S A Tの方々と訓練したり…とかあ？…後は…（なんだろう？）」

改めて妹の質問に普段のオフの時の自分の行動を思い返すと、自分はリア充ではないと落ち込んだ。

「うーん、会社の人達や友達とお買い物したりとか…食べ歩きとか…」

「お買い物？どんな？」

I Yは妹が期待している程の答えが思いつかずにいた。「この子に商店街で日用品買ったり、ドラッグストアで化粧品買ったりするのは、ありきたりだし…食べ歩きも、ラーメンとかだし…スイーツの食べ歩きなんてしないし…I Mとの買い物は専ら彼女に連れまわされているだけだし…」I Yはテンパってつい、

「そ、そーですね、普段使うモノが多いですが、あと服ですね…特にゴシックロリータ…しまった！」

と上ずった声で答え、うっかり、自分の服の趣味を妹に話してしまった。以前、白山亭が再開する前、年季の入った店内に見合う服装…と言う事で、趣味のゴシックロリータの服を着て、H G達に驚かれた事があり、以後封印したのを思い出した。（その後で、白山亭の2階にかつての女給服があるのをH Gが思い出した）

恥ずかしさの余り赤くなり、顔を手で覆った。「（これは、ドン引きされて軽蔑されるかな？）」と、指の隙間から恐る恐る妹の顔を見ると、B Kは嬉しそうに

「姉上様も、ゴシックロリータ調の服がお好みですね」

「…？」

「私もなんです、姉上様」

と言ったB Kの目が怪しく光った。

「（えー）」とI Yの顔が引きつる。

その晩、B Kの部屋でゴシックロリータショーになった。

I YはB Kが次々とクロゼットから引っ張り出すゴシックロリータ調の服に、妹共々着替え、スマートフォンで撮影していた。

I YはB Kの身長が先輩であるH Yに近いので、短いスカートに焦っていた。ただ、二人だけのゴシックロリータショーであるのと、妹が喜んでいるので「（まあ…いいか）」と半分ヤケになった。但し、後日スマートフォンに撮影された自分達姉妹の写真の事を考えると、気落ちした。

●B Kの出自

B Kの就寝前、I YはB Kのベッドの脇に椅子を持ってきて座り、B Kと話を続けた。

「あの…姉上様？」

「はい」

「姉上様は、今はI Yと名乗っていますけど…」

「はい、私の『I』と言う姓は母のものです」

「どうして？」

「父上から聞きましたが、私の母は庶民で私は侯爵家の父上と庶民の母との間に生まれました。庶民の子ですので、父と母は結婚することなく、母の手だけで私は育てられました…その時に母から『あなたの父親は亡くなった』聞かされて育ちました。やがて母が病気がちになり、亡くなる寸前で、私の父と名乗るB侯爵が現れ、私を引き取りました…その時にはB Yになりましたが、既に義母上にはCがおり、家督相続権はCあるので、大学を卒業する

と同時に私は家を出され、I Yに戻りました」

I Yが話をしている最中にB Kが泣き出した。

「どうかしましたか？」

「姉上様…可哀想…」

と言つて、B KはI Yに抱き着いて泣いた。

B Kが泣き止むと、

「姉上様、今度は私の話を聞いてください」

「はい」

「私は、この家で生まれました。母上は、J伯爵家所縁の人です。いまでもJ伯爵家に居ます。ただ母上は、父上との政略結婚のためにJ伯爵家に庶民から養子に入ったそうです。ですので、私も姉上様と同じく『庶子』だそうです」

「本当ですか？」

とI YがB Kの言葉に「（…私と同じ）」と驚くと、B Kは続けて、

「はい、母上が私にこの家に来る前に打ち明けてくれました…多分父上は母上が自分の事を私に話している事を知らないと思います」

「それで、義母上が皇王家から降嫁され、父上の正妻になり、兄上が生まれ、続いて私が生まれると私は母上共々J伯爵家に移りました」

「（私がここに來たのは、確かCが幼児期の頃だから…入れ違いか、だから私はこの子を知らないんだ…）」

「私がここに呼び戻されたのは、兄上が全寮制の高校に進学する時です」

「（私がここを出た後…）」とI Yが考えていると、

「…だから、私達入れ違いでお互いを知らないのですね」

「そうなりますね、姉上様」

それを聞いて、I YはB Kの身の上が自分に近いと感じ、この妹の将来について、不安になった。

I Yは「(やはり、この妹が最後の一人とは、私には思えない…この先、第二第三の妹か弟…いや、姉・兄が出て来るかもしれない…だから、父上はわざわざ私を妹の警護に…准尉はご存じなのかしら?)」と思った。

● I Y母校を訪れる

翌日から、I YはB K専属侍女として通学に付き添い、また学内に入る事になった。I YもB Kの通学しているお嬢様女子高のOGで、かつては専属侍女を連れて通学していた。

「(…よかった…バレてないみたい)」

送りの車から降りて、学校の正門を潜る際、I Yは自分がかつてこの学校のOGと気づかれるのではないかと内心ビクビクしていたが、意外と気づかれていなかった…周囲はI Yの顔より、I Yの着ているB侯爵家の侍女の服がカムフラージュになっている事に気づいた。I Yは学園内を見回して「(卒業以来だわ…何も変わってないのね)」と感慨深げにB Kの後ろについて歩いた。

授業中は教室に入る事はないので、学内にある侍女が待機する建物に入り、主(この場合、B K)の授業が終わるまで、昼休みと放課後以外は特に用事が無ければ、この部屋に待機する。

待機中の侍女達は、グループを作ってお喋りしたり、内職(裁縫とか、編み物等)をしたり、本を読んでいたりと、勝手にしている。

I Yは学生時代この部屋に入る事がなかったので、新鮮に感じ辺りを見回していた。

「あら、あなた新入り？どこの御屋敷ですの？見たところ、B侯爵家の侍女の服を来ていますけど…」

といきなり尋ねられ、I Yは座っていた席を立ち、

「はい私は、B侯爵家のKお嬢様の新任の専属侍女I Yと申します。以後お見知りおきを…」
と言つて、I Yはスカートの端を持って挨拶する。

「あら…B侯爵家ですの…私はJ伯爵家の者です。よろしく」

I Yは「（この人が、Kの実家の人ね）」と思った。

「私は、A侯爵家の者よ、よろしく…ところで、前の専属侍女のG Oさんはどうなされたの？」

「はい…G Oは実家に用事があるとの事で、一時的に暇を出されています」

と言つて、I Yは「（今、家（B侯爵家）に居ますけど…）」と内心舌を出していた。

「そうでしたか…一時的にお暇を…」

それを聞いてI Yは「（こういう人達は、何かと噂話のネタを探しているから始末に負えない…うっかり、『B侯爵家がG Oに暇を出した』なんて答えようものなら、たちどころに広がって、任務が終わった後G Oが大変な事になる）」と、I Yも芸能事務所のタレント達の警護任務で嫌と言うほど見てきているので、あしらい方も心得ている。

「I Yさんは、この学校は初めてですか？」

「はっ、はい（既に10年程前に来ていますけど…）」

「そうですか…では、後で学内をご案内しましょうか？」

「…そうですね。よろしくお願ひいたします（多分、貴方以上に隅から隅まで知ってますけど…）」

I YはA伯爵家の侍女の言葉にいちいち心の中でケチを付けていた。しかし、他家の先輩

侍女達に目を付けられない様にするため、従順に徹した。

B Kが本日の授業を終えたので、I Yは彼女の教室に迎えに行った。

「あね…じゃなくてI Y」

「はい」

「私はこれから、部活動に行きますので…体育館で見学して待っていてください」

「はい」

と答えるI YにB Kは小声で「(…)めんなさい…姉上様」と言うと、「(いいのです)」と

I Yも小声で答えた。

B Kの部活動はバスケット部で、かつてこの学校の道場で組手(こちらの世界でいう空手のようなもの)をしていたI Yとは違う…I Yには組手の道場であつてのI Yを知るものに出くわす可能性があつたため、それが却って都合が良かった。

こうしてB Kの学校での1日が終わる。

帰宅して、ティールームでお茶を飲みながらB 侯爵夫人と今日の学校での出来事を報告するB Kの後ろに控えて黙っているI Y…その後B Kの部屋でB Kの着替えを手伝っている時、

「姉上様…」

「なんです?」

「学校で呼びつけにして、ゴメンナサイ」

「いいのです。あの場では私は貴女の専属侍女の役ですから…これからもあの様に接して下さる」

「姉上様、そんなこと言わないでください」

涙を流してI Yに抱き着くB Kを優しく受け止めて、

「あらあら、初日からこれでは後々大変ですよ。もっと、堂々となさい」

「…それにしても、今日は私があの学校のOGとばれないか冷や汗ものでした」

「あら、姉上様は私の学校の？」

「はい…OGですよ」

「姉上様は、私の先輩なのですね」

「そうですよ」

I YとB Kと互いに笑った。

「姉上様は、学校の部活は何だったのですの？」

「私は…組手をしていました」

「そうなの？」

「はい…おかげで、今の仕事で役に立っています」

と言って、I Yはポーズをした。

●楽しいショッピングはずが

「姉上様、こっち、こっち」

週末、B Kのショッピングモールでの買い物に連れ出された。B Kのプライベートなので、I Yは碓屋の制服姿にH Gから借りてすっかりヨレてしまった帽子を被り、妹に引っ張られるまま次々と店を回っていた。

日頃体を鍛えているとは言え、女子高生のノリにはついて行けず、I Yは色々な意味で疲れてしまった。

「あれ… I Yじゃないの？」

妹に振り回され、疲れてコーヒーショップで休憩していると、ふと声をかけられた。

「？」

「あたしだ、あたし」

片手にコーヒーの入った容器を持ち、反対側の手で掛けてたサングラスをずらし、深くかぶった帽子のつばを上げた人気歌手 I M が居た。 I Y とは過去何度も I M に対するストーリー被害や同業者からの嫌がらせ等の警護任務を請け負った仲である。なので、 I Y もいまや年齢の近い I M と親友関係になっていて、任務でない時も二人でネットや電話でプライベートな事も話す仲…なので、会話も当然砕けたものになる。

「あら、 I M…奇遇ね、今日はオフなの？」

I M は I Y の向かいの席に座ると

「うん…あんたは？」

「…任務」

「そう…大変ね…で、依頼人は誰？」

I M は興味津々で訊ねる。

「… J K (この場合、女子高生の事です…守秘義務があるため個人名は親友でも明かせない)」

…(うっかり、妹と言いきった)」

「へー、 J K ね…」

と言う会話をしていた所に B K が

「姉上様ー」

と言って、小走りにコーヒーを持ってきた。

それを見て「(あちやう折角、依頼人の事伏せていたのに…)」 I Y は額に手を当てる。

コーヒーを運んできたBKは、IYの座る席の前に見知らぬ女性…しかも、サングラスに帽子姿でBKには不審者に見えた…が座っているのを見て警戒した。IMはBKを見て

「あら、可愛い娘じゃん！この子が警護対象？ん…ちよつとこの娘、今あんたの事『姉上様』って言ってたけど…どんな関係？」

と矢継ぎ早に聞かれる。IYは詰まっていた。

BKが不思議そうにIMを見つめてコーヒーを持ったまま立ちすくんでいるので、IYはハタと我に返り、

「あつ大丈夫ですよ、この方は私のお友達です」

とIMを紹介した。BKはコーヒーを乗せたトレイをテーブルに置くと、

「始めまして…姉上様の妹のBKです」

それを聞いてIM「(妹…IYの?)」と驚いて、テーブルに乗り出し、「(ちよつと、IY!)」とIYの左耳にある補聴器(IYは左耳が生まれつき難聴で補聴器を付けています。

作者注)に向かって小声で話す。IYもIMの声のトーンに合わせて、「(この子が警護対象の私の実の妹よ)」と言うと、IMは椅子に座り直し、

「そーなん…この娘がねえ…、ま、あんたこっちに座りなよ」

と、BKに隣の席を示して、にやけて言った。IMはIYがB侯爵家の出であることを知っている。また、IYがB侯爵家を放逐された事も…BKが席に着くと、親指で自分を指して、

「あつ、あたしはIM。こいつ(IY)のダチ」

「…『ダチ』って何ですか？」

「お、お友達と言う意味ですよ」

IYがフォローする。IMはBKに対して改めてB侯爵家のお嬢様と言う事に、

「なんか調子狂うな」

「IMさんですね、姉上様と仲良くしていただき、ありがとうございます」

と、丁寧な挨拶をする。

「チョット…K」

つい、油断して素が出てしまった。

「IMさんは、姉上様と同じ仕事をしているのですか？」

「いや、あたしはこれでも歌手だよ」

「歌手…えっ、そういえば…あの人気のIMさ…ウグっ」

BKが驚きの声を上げようとした瞬間、IMがBKの口を塞いだ。

「シー、今あたしはプライベートなんだ…。ゴメンね」

BKが頷くとIMは手を離れた。

「ここで、IMさんに会えるなんて光栄です。それに、姉上様のお友達だなんて…凄いです姉上様」

IYとIMは「(二人とも、仕事で出会ったんだけどね…)」とは言えなかった。

●IY撃たれる

「はい…碇屋HGです…ナニ？」

スマートフォンで電話に対応するHGの真剣な声に、周囲は緊迫感に包まれる。

HGはおもむろにスマートフォンを持ったまま男屋のブラインドを隙間に指を入れ、それを下に下げて外を見ながら

「あっ、IMさん…毎度御贔屓に…って、ナニ！IYが撃たれて入院したあ？」

それを見ていたHY「そんなこと、やっている場合か！」と、突っ込む。

HGが慌ててHYを連れてIYが救急車で運び込まれた病院に車で向かった。

待合室に女性警察官と居るB KとI Mを見つけ、H Yに二人を頼み、H GはI Yの病室に向かった。

H G達が駆けつけると、病室でI Yが

「准尉…申し訳ありません」

「どこをやられた？」

「右足と左腕です」

「うーむ、そうか…で、反撃は」

「できませんでした…利き腕をやられて、それに相手が子供だったので…」

「…そうか…何よりだった…本当に良かった。状況を説明できるか？」

…ここで、H GがI Yに対して、反撃云々について訊ねてI Yの応答から『何よりだった』と言ったのには、2つの意味があります。一つは、I Yが致命傷を追っていない事と、もう一つは行政機関の長の事前許可“発砲許可申請”（銃器発砲許可申請書）の事です。もっとも、後者はI YがB Kの命の危険に際して任務として発砲しても、正当防衛として認められますし、二人の実家であるB侯爵家が擁護してくれませんが、H Gは申請書の手続きが面倒なので、I Yが反撃をしていな事に対して『本当に良かった』とえげつない事を言っています。作者注。

「はい」

I YはH Gの銃撃された時の事を詳しく話した。H GはI Yの話を聞くと、

「うん…それでいいよ、この後警察の事情聴取があるから、そのまま素直に話してくれ」

医者に訊ねるとI Yは右の太腿に貫通銃創…骨には影響がない、左腕に銃弾のかすり傷がある。弾丸はいずれも拳銃弾、ただしフルメタルジャケットの弾丸だったので、I Yの体

内に鉛が残る事は無いとの事。

やがて所轄の警察から刑事が来て、事情聴取に立ち会う。

「NM署捜査一係のTHです。どちら様ですか？」

「HGです。彼女の所属するエージェント会社碇屋の社長です」

と言つて、HGは名刺を差し出す。刑事は名刺を確認し、

「分かりました、事情聴取に立ち会う事を許可します」

刑事は、HG立会いのもとIYに対する事情聴取を始めた。

「どこで、銃撃されましたか？状況を説明できますか？」

「帝都の××ショッピングモールのコーヒーショップで、テーブル席で友人と妹と話をしていた時、不意に友人が『IY後ろ！』と叫んだので、咄嗟に友人と妹を庇うべく立ち上がりました。妹は友人の機転で椅子から突き飛ばされて、擦り傷で済み、友人はテーブルの下に潜ったので、射線から外れる事ができました。私は、二人に立ちふさがるように立ち、座っていた椅子の背後から拳銃を構えている子供：高校生だと思います：有名な全寮制の高校の制服を着ていたので（IYは弟のBCの居る学校の制服をこの時は知りません。作者注）。その子から、3発撃たれました。一発目は左腕、2発目は右脇腹、3発目は右足：2発目の銃弾は服の下に着用していた防弾ベストで止まりましたが、後の二発は防弾ベスト以外の所です。撃った犯人は、拳銃を持ったまま逃走しました」

「くわしい説明ありがとうございます。ずいぶん詳細に説明してくれましたが…」

と刑事が言ったところで、HGが

「彼女は私の経営するエージェント会社の社員ですが、以前は民兵会社に勤めていました。妹というのは、弊社が請け負った彼女の警護対象で、友人とはたまたまその場所で会ったそうです」

「なるほど…それですか…ありがとうございます。ちなみに特別銃器携帯・使用許可証はお持ちですか？」

「はい…あのポーチに」

「ちよつと失礼します」

刑事はポーチをIYに渡し、IYがポーチの中から特別銃器携帯・使用許可証を出して刑事に渡す。刑事はそれを確認し、

「ご協力ありがとうございます。ちなみに許可証の登録番号を控えさせていただきます」

「はい」

刑事はIYの特別銃器携帯・使用許可証の登録番号を持っていたスマートフォンで表裏撮影し、

「ちなみに…あなたは発砲しなかったのですか？」

「はい…利き腕をやられましたので」

「利き腕？」

「あの、刑事さん彼女は左利きです」

「…そうでしたか、それから拳銃を拝見…」

と言って、刑事はベッドの横にあるテーブルの鍵のかかる引き出しからIYの愛銃を取り出し、これもスマートフォンで撮影した。

「HGさん」

「はい」

「この拳銃は、一度署で預からせていただきます」

「はい、わかりました」

「あつ、HGさん」

「はい」

「後で待合室に居る彼女の妹さんと、ご友人に話を伺いたいのですが…」
それを聞いてH Gは「うーん」と唸ってしまった。

「どうしました？」

「…いや、2人ともやんごとなき事情の方なので…」

「どういう意味ですか？」

「彼女の妹と言うのは、今回弊社が彼女のご実家から請け負った警護対象で…くれぐれも内密にして欲しいのですが、実は彼女はB侯爵家のご息女でして…今は侯爵家を離れて別姓を名乗り、弊社に勤務しています。妹は、現在B侯爵家のご息女です。あと、友人は芸能事務所〇×エージェンシー所属の歌手I Mさんでして…」

「エッあの人気歌手の？」

「シーー声大きい」

「…そういう事ですか…」

「ですので、簡単に話を聞いて、2人を解放してください。あまり立ち入ると、妹さんのご実家と友人の芸能事務所の圧力が掛かりますので、ご注意ください」

「はい、ご協力感謝します」

待合室でI MとB Kを探しているとH YはH Gの姿を見かけ、

「あつ、准尉！こっち」

H GはB Kの前に膝をついて、B Kの目線に合わせ、

「始めましてKお嬢様、貴女の姉上の勤めている会社の社長、H Gです」

「…あのう…姉上様は？」

H Gを見るB Kは涙が枯れ果てたのか、瞼が腫れぼったくなっていた。H GはB Kを安心

させようと、ニツコリほほ笑んで

「はい、銃で撃たれましたが、意識はしっかりしています」

「姉上様に会いたい！」

「はい、わかりました」

「…でも、一度お顔を洗った方が良いですよ。そのお顔では姉上が悲しみます」

「はい」

B KはH Yに連れられて洗面所に向かった。

I Yの病室にI MとB Kを連れて行く。病室にはベッドに横たわりまだ刑事と話をしているI Yが居た。

「姉上様ー、わーん」

B Kがベッドに居るI Yに抱きつき泣きじやくる。I Yはそんな妹の頭を撫でる。刑事がB KをI Yから離して話を聞こうとするが、I Mが遮る。

「この子はなにも知らないよ！あたしが話すよ」

I MもB Kを庇って言った。

●子供は帰れ！…めんどくせー

I Yが撃たれて入院したので、H GはI Yの入院先からB KをB 侯爵邸に送り届けるのと、B 侯爵に報告に行くためにB KとH Yを乗せて自分の車でB 侯爵邸に行く、その道すがら

「准尉、I Yの代わり…わたしにやらせてもらえませんか？」

「この任務、お前には無理だH Y」

「…なぜ？」

「こういう貴族階級のしきたりとか、お前さん知らんだろう…俺は、この仕事IYだからこ
のできると思い、任務先がIYの実家で嫌がるだろうが、B侯爵の強い要望と彼女の知識・
経験から他に人がいないので、俺も強引に彼女を説得したんだ」

「じゃ、TYでは？」

「あれ(TY)も家柄はいいけど、貴族階級ではなく代々の軍人一家だから無理だな…ああ
言う貴族階級って、日常が神経戦の連続だから、お前さんとメンタルやられるぞ」

「無理ですね…」

HYはかつて精神科に通院していた時のことを思い出していた。

B侯爵邸にて、HGは事の次第をB侯爵に説明する。

「この度は、こういうことになり、誠に申し訳ありません」

「社長、あれ(IY)の容態は？」

「拳銃で3発撃たれました。左腕、右脇腹、右足とです。右脇腹の銃弾は上着の下に着用し
ていた防弾ベストで止まりましたが、後の二発は防弾ベストでカバーしていない所ですの
で、怪我を負いました。幸い、利き腕の左腕はかすり傷で右足は銃弾が貫通しているので治
りが早いでしょう…1週間もすれば杖ついて歩けるようになると医者も言っていました」

臨席していたB侯爵夫人は、

「全く、あの女…役に立たちません事」

と言つて、「フン！」と鼻を鳴らした。

HYは「(義理でも娘だろ！)」と、人を人とも思わないIYの義母に憤りを覚えた。

「とにかく、早く誰か寄こしなさい…これではKの身の安全が図れません」

B侯爵夫人がHGをせかす

「はあ…今のところ、弊社に彼女(IY)の代理が務まる人がおりませんので…」

「御社では人がいないと言う事ですか？」

B 侯爵が問いたです。

「人は居ますが…横に居る彼女の様に…私が言っているのは、お嬢様をお守りするために、貴族階級のしきたりとかの知識を持った人材が居ないことを言っています」

「あら…あなたの横に居るのはあなたの会社のエージェントなんですか？こんな子供が…」

B 侯爵夫人はHYを指さしあざ笑うように言った。それを聞いてHY、流石に頭に血が上った。

HYはジャケットの下に隠してある拳銃に手を掛けようとしたが、HGに腕を掴まれた。驚いてHGを見ると、HGは顔だけB侯爵夫妻に向いては居るが目はHYを見ていた。その目は威圧感を持っていた…HYはHGが目で「落ちて着けHY!」と言っている感じがして、懷から手を出した。

「奥様、そうおっしゃいますが、手前ども未成年は雇用しておりません。彼女(HY)は弊社のエージェントではナンバー1です」

「ホントかしら…」

HYは「私こう見えても、40代です」と言って、ジャケットのポケットからパスケースを取り出し、特別銃器携帯・使用許可証をB侯爵夫妻の前に提示した。

B侯爵夫妻は特別銃器携帯・使用許可証のHYの生年月日を見て驚くわけではなく、ただ頷いた。

「わかりました。お仕舞下さい」

とB侯爵が言ったので、HYは「(なんかいつもと反応が違う(いつもなら『えー、40代?』と驚かれる)…貴族階級ってこーなの)」と拍子抜けしてパスケースをしまった。

それを見ていたHG…「(普段年齢を隠しているくせに…)」と苦笑いをした。

「社長（B 侯爵夫妻の前なので『准尉』とは言わない）…やはりこの仕事、I Y が復帰するまでは私がやります！」

H Y が H G の腕を引っ張る

「…だから、さっきも言ったとおり、お前じゃ務まらんよ」

H G が困り顔で答えると、

「いえ…わたしにやらせてください！！」

H Y が得意のおねだりの上目遣いではなく、真っ直ぐに H G の目を見て言う…

H G は「（こいつ…いつもの癖（意固地になる）が出たな）」と思い、暫く無言で考え、

「…さて、どうしたものか…めんどくせー」

と、ボソツと言った。

「うわっ！でた」

と思わず H Y が言って、慌てて口を塞いだ。

H G がこの「めんどくせー」と言うと、大抵現在の問題について解決策が用意されている。

H G は B 侯爵夫妻に I Y の後任に H Y を就ける事を話し、それについていくつかの提案をし、B 侯爵邸を後にした。

H G は白山亭母屋に帰ると、早速、H Y にカメラ・イヤホン・マイクが内蔵されているウェアラブルグラスを着けさせ、H Y のスマートフォンとリンクさせ、次にノートパソコンとネットワークでつながるよう設定した。

翌朝、H Y を B 侯爵邸に車で送ると、その足で I Y の入院している病院に赴き、I Y にノートパソコンを渡した。

これで H Y を B K の警護任務に就かせ、I Y は H Y のウェアラブルグラスの情報からサ

ポートを依頼する事にした。これで、I Yが杖について歩けるようになるまでの1週間何とか乗り切る気でいた。

● H Yの任務初日とI Yの黒歴史

H Yの任務初日、テイルルームでB侯爵夫人から

「本日はKの身辺警護をお願いしているエージェントのI Yが銃弾に倒れましたので、代理の方をよこして貰いました」

と言って、B侯爵夫人は扇を持った手でH Yを指す。

「皆さま初めまして、自己紹介をさせていただきます。エージェント会社碓屋のエージェント、H Yと申します。この度は当社のサービスを御利用いただきまして誠にありがとうございます。引き続き怪我をしたI Yになり替わり任務に就かせていただきます。I Yの怪我につきましては、弊社を代表してお詫び申し上げます」

と言って、H Yは頭を下げた。

それを見ていた、童顔小柄のH Yに周囲の人々が「こんなに小さい子が…Kお嬢様と同年の子かしら…」とざわめいた…それを聞いてH Yの顔が引きつる。

病床からのI Yのサポートもあり、H Yはその日の任務をなんとかこなした。

その晩、B Kの部屋で

「あのう…H Yさん」

「なんでしょう」

「H Yさんは姉上様とは、どういう関係ですか？」

「そうですね…私は彼女…Kお嬢様のおね…いや、姉上様…ですかあ？が以前に居た会社（民兵会社）の先輩になりますかねえ…わたしと…あ、姉上様とは年がかなり離れています

ので、あ…姉上様が入社した頃には、わたしは会社を退職して実家の稼業を手伝っていましたから…でも共に今の会社の社長（H G）がその会社に居た頃に新入社員として入社して社長に教育と訓練を受けたと言う事は同じですし、その後私の実家の側で社長に再会して、そこに会社の所用で出張してきた、ああ…姉上様と出会って、あのーあ姉上様が社長の会社に転職したいと言ったのを聞いて、私も一緒に会社に入社しました」

H Yは、はるかに年下のI YについてB Kに「姉上様」と上手く言えずに、詰まりながら話した。

…その会話をH Yにかけているウェアラブルグラス越しに聞いていたI Yは「（H Y先輩…相変わらず自分が都合の悪いところを誤魔化しているのと嘘と方便が交じってますよ）」と苦笑した。

「…という事は、昨日お会いした姉上様の会社の社長様は、姉上様達の先生でいらして、H Yさんは姉上様の先輩なのですね」

「アハハ…そうなるのかなあ」

H Yは頭を掻きながら照れ笑いをした。

「その頃の事、教えていただけますか？」

「…いいですけど、さっき話しました様に、わたしとあ…姉上様が出会ったのは、私の実家の側で社長と再会した頃に初めて会っていますから、その時以降の話しかできませんよ」

その会話を聞いたI Yはギョツとして「（やばい…あの事（F県領地事件での『赤ずきんちゃん作戦』の事（『巻き込まれ親父の撤退』参照）をバラされる…）」と思い、

『H Y先輩！やめてください！！』

とヘッドセットで言うが、それを耳にしたH Yは

「…ちゃんと機能しているわね…」

とシレつと言って通信を切った。

HYに通信を一方的に切られ、次にHYが妹に自分の恥ずかしい姿の写真を見せると想像し、焦ったIYは

「せんばーいーいー」

と悲痛な声で叫び、今度HGが来たら、HYのウェアラブルグラスに24時間の録画機能がないかを聞いてみようと思った。

その晩の就寝前までのBKの部屋では、BKとHYの身長と体格が近いので、BKと共にBKのゴシッククロリータファッションショーになり、後日BKのパソコンからIYのスマートフォンにメールで送られてきた数々の写真を見てIYの失笑を買った。

「(Kちゃんよくやったー！これであの時の写真(F県領地事件での『赤ずきんちゃん作戦』の時にHY先輩に撮られた写真「巻き込まれ親父の撤退参照」)との取引条件ができたわ)」と、IYは喜んだ。

●B侯爵の本音

IYを銃撃した拳銃はリボルバーの38口径ACP弾。警察はBKではなくIYに対する殺人未遂と言う事で捜査本部が立ち上がった。この件について人気歌手IMが絡んでいるのと、B侯爵家令嬢BKも絡んでいるので、政府から重要捜査対象になり、またマスコミに対する報道管制が敷かれた。

IYの証言より銃撃犯は、BKの兄BCが居る全寮制の高校の制服を着用しているのがすぐに分かった。

H Gはその情報を地元の港町警察署の署長から得ていた。

なぜ、B Kの兄B Cが居る高校の生徒がB Kを狙ったかについては、H Gは「(B Cが現在巻き込まれている学内抗争によるものであり、多分B C側と対立する勢力がB Kを狙ったもの)」と思ったが、同時に「(なんでそんなに学内抗争が過激になったのだろう...)」と不審に思った。

I Yが入院している病院にH Gは毎日訪れていた。その目的は2つ：1つ目はI Yの回復具合とリハビリの進捗：これはI Yの若さのおかげで順調に回復しているとの事。もう1つは、B侯爵邸にいるH Yとの打ち合わせ。ウェアラブルグラスを着用しているH YとI Yに渡してあるノートパソコンを使用して、I Yを交えて仕事の話とか、B侯爵家内の話について報告を受けていた。

H GはH Yとのリモートの打ち合わせで「(これは今後使えるな：遠方の部下達の状況をリアルタイムで把握できるのは便利だ：この前のフェリー事件の様な兵力が分散する場合(「巻き込まれ親父の突撃」参照)はなおさら：半面プライベートとか着替えとかの機微な情報まで入ってきてしまうのは問題だな：特に自分と娘どもでは：あつ、単純に外せばいいのか...)」と思った。

H Gが白山亭に帰るべく病院のフロアを歩いていると、待合室にB侯爵と秘書の姿を見つけた。H Gが近づくとB侯爵も気づく、B侯爵秘書が見舞いの品を持ってその場を離れると、そのまま待合室で話をした。

「侯爵様、今日はお嬢さん(I Y)のお見舞いですか？」

「そうです。Kから見舞いに行くように言われましたので」

「そうですか」

「でも、私があれば（I・Y）の見舞いに病室を訪れても、あれは喜ばんでしょ…」

「そうですね」

「私はここに居て、見舞いの品を秘書に持たせて行く事にしました」

「そうですね…まだお嬢さんとの間に蟠りが…」

H Gは残念そうな顔をした。

「私とあれにはかなり深い溝がありまして…あれの母親は、私が若い頃家の使用人をしておりました。その頃、私は家の方針に反抗しており、そんな私に心の癒しの場を彼女が与えてくれました。私も若気の至りで、それ故に彼女の優しさに手を付けてしまいました。彼女も私を黙って受け入れてくれました」

「そうですね」

「その後、私の子供を身ごもっていると知り、密かに私から去ってしまいました。その後J伯爵家の財政が傾いたので、J伯爵家から妻を娶いました。その妻とは上手くいっていたのですが、ある時、皇王家から姫を正妻に娶る事になり、私には既にJ伯爵家から来た妻が居ましたので、縁談を断わろうとしましたが、やんごとなき事情で皇王様の申し出に従う事になりました。しかし私は、皇王様に抗議の意味で妻は離縁せずに屋敷内に住まわせていました」

「ほお」

「正妻の懐妊が分かるとほぼ同じくして、妻にも懐妊の話がありました。正妻はプライドが高いので、何かにつけて皇王家の権威をカサにモノを言います。そのため…正妻は妻に懐妊の話に心中穏やかではない事を感じ、私に妻と正式に離縁するように迫りました。無論私はその気がないので言を左右にして断りましたが、先に正妻に男子が産まれ、続いて妻が女子を産みました。女子でも、将来B侯爵家の家督を継ぐことについて、危機感を覚えたのでしよう…正妻が妻に毒を盛るとの話を目にして、慌てて妻を実家のJ伯爵家に帰しました」

「そんなことがあったのですね」

「私は妻を娶り、更に正妻を娶っても、あれの母親の事が忘れられず密かに探していました…やっとの事で探し当てたら、彼女は女の子を出産し一人で育てていたが、癌におかれ余命いくばくない状態になっていました。私はまだ子供のあれを引き取り、彼女の癌が治る事を信じて援助しましたが、願いむなく彼女は逝ってしまった…私は残されたあれを彼女の分まで幸せになって欲しいと思って成人までは面倒を見ていましたが、如何せん、あれの耳の難聴と正妻との確執があったために、あれが結婚するまで手元に置いておく事ができなかったのです…そのため、大学を卒業すると同時にあれを家から出し、あなた（HG）の居た会社に預けて援助だけは続けていたのだが、何故かあれはあなたの元に行ってしまった…」

「もう一度話しますが…彼女は家を出た後、ずっと死ぬことを考えていました…私が彼女の『死にたがり願望』とでも言うのでしょうか…それを生きる事が大事と言う事を私と共に居ることで実感したと彼女は私に話してくれました」

「そうでしたね…あれがねえ…そんなに思い詰めて…苦しんでいたのですね」

B侯爵は目から自然に涙が流れた。

「はい」

「私はあれが早く独り立ちして、私を必要としなくなることを強く望んでいます。それで、私は今回あれに妹のKの警護と言う役割を与え、あなたという人物にあれを預けていて良いものか、またあれの成長ぶりを知りたくて、今回あなたに警備任務を依頼しました…まさかこのようになるとは…私は、あなたとあなたの部下達とあれはもう切っても切れない関係だと私は感じました…わたしは、あれをあなたに信用して託します」

「侯爵様の深謀遠慮…私は感じ入るばかりです…それですが、B侯爵。あなたにお願いがあるのですが…」

「私にお願い？」

「はい」

「お願いは2つあります。1つ目はご子息Cさんの事について、Cさんが現在巻き込まれている学内での抗争で命を狙われていると言う事です。Kお嬢様も命を狙われた以上、事態がおかしくなっている様なので、詳しくお聞かせ願いますでしょうか？」

「はい…そうですね、ここに至っては当家の恥を忍んで話をすべきですね」

B侯爵は現在B Cが巻き込まれている学内抗争についてH Gに説明した。

「…成程、そう言う訳でしたか…それと、もう1つ」

「…はい」

H GはB侯爵と話をした。その内秘書がI Yの病室から戻ってきたので、B侯爵とはここで別れた。

そこに港町水上警察署のK Jが花束を持って歩いているのを見つけたH G。K Jを驚かそうと、先回りしてI Yの病室に行く。

「准尉、忘れ物ですか？」

「いや…」と言って、ベッドのカーテンの陰に隠れるように椅子に座った。やがて花束を持ったK Jが現れる。

「やつ、やあ！I Y…具合はどお？」

「…あんだ！なんで私がここに居るのを知ってるの？」

K Jを見て驚いたI Y。カーテンの陰に座っているH Gを見ると、H Gは笑って口到人差し指を当てていた。I Yは「あつ…もしかして…」と思った。

「いや…君の姿がここ数日見かけないから、白山亭の人に聞いたら、大怪我して入院したと言うじゃないか…それも帝都の病院に…そんなに重症なら、是非お見舞いに行かないと思

って、教えて貰ったんだ」

「(TTの奴…)」HGがボソツと言ったのをIYの左耳に入れている補聴器が捉えた。

「そうですか…それはありがとうございます(私がここに入院しているのを教えたのは准尉じゃなくてTTさんなんだ)」

IYは白山亭店内同様、塩対応をする。それにめげずKJは花束をIYに差し出した。

花束を受け取ったIYはKJに「ありがとうございます」と言っただけ…

「もっと愛想良くしろよ…」とHGが言う。

●事件の顛末

B侯爵から聞いたBCの学内抗争とは、高校での生徒会長の候補者にBCと対立する候補が居て、対立候補を貶めるために、BCと親交の深いJ伯爵家子息が対立候補の裏口入学疑惑を持ち出し、ネガティブキャンペーンを行った。

対立候補生徒が政治家の息子であったため、このネガティブキャンペーンは真実味を帯びていた…ところが、新聞部の取材により、裏口入学疑惑が本当であり、更に学校理事に対する裏金疑惑が浮上したので、この話を抹消するため、対立候補がBCと親交の深いJ伯爵家子息の口を塞ごうと脅迫したが、二人とも身边警護が厚いため埒があかず、B侯爵家とJ伯爵家の共通点であり、警備が手薄であろうBKの命を狙い、この度の銃撃事件に発展したとの事。

政治家の息子は、BKを脅かす目的で親派の暴力団幹部の息子に指示をする。息子が子分の生徒に実行を指示し、その子分がまた次の子分…と伝言ゲームになり、実行役の生徒(結局本人は脅されいた)が指示を「殺害しろ！」となってしまう、拳銃を手に入れ犯行に及んだとの事。

なお、銃撃した犯人は帝都の××ショッピングモールに設置してある監視カメラと、外部

の監視カメラでその姿と顔、また逃走途中で遺棄した拳銃の位置まで把握され、警察に確保され、それから芋づる式に暴力団幹部の息子と政治家の息子まで遡れた…警察に取り調べが済んだら、国家公安局に送検され、そこでB Cの生徒会長選の対立候補の政治家息子に対する裏口入学疑惑と学校理事に対する裏金疑惑について徹底的に調べられるだろう…

H Gは「(今の監視カメラって怖いなあ…これから、公の場での暴力とかはしにくくなるだろうね…ただ、権力側が悪事に用いるとF県領地の時のような(「巻き込まれ親父の撤退」ならびに「巻き込まれ親父の反撃」参照)」と思った。

以前、B侯爵がH Gに仕事の依頼を話していた時に、

「悪い連中と付き合っていると、殺人予告が当家に来たりしているのです」

と言った『悪い連中と付き合っている』と言うのは、B侯爵夫人がB Kの母親の実家である、B Cと親交の深いJ伯爵家子息の事を指しているのが判明した。母親同士は仲が悪いが、息子達は仲が良い。それに対してB侯爵夫人は我慢ができないらしい。

H Gは「まるで子供の喧嘩だね」と一刀両断した。

●やっぱり私より、I Mが目的なのね

「また、あの人来てるわよ」

白山亭の女給達がひそひそと話す。噂の彼は港町水上警察署の捜査官のK J。やがてI Yが女給姿になって、「I Y入りまーす」と言ってバーカウンター横の通用口のドアを開け、スカートの端を軽くつまんで会釈をして入ってくると、いつもの様に他の女給達に捕まり、水とお絞りと注文伝票の乗ったトレイを渡され、送り出される。I Yは仕方なくK Jの席に行き、

「いらっしやいませ。ご注文は？」

と慇懃に対応する。

「ああ…オリジナルコーヒーとミックスサンドイッチを…」

I Yの女給姿を見たK Jは嬉しそうに注文するが、

「はい、畏まりました」

I Yはいつもの様に素気なく注文を受け、カウンターに行くと「オリジナルコーヒーとミックスサンドイッチ…」と注文を繰り返す。

T Tは、

「相変わらずねえ…もつと愛想良くしたら？」

「いえ…（大体、あなたが私の入院先をあいっくに教えるのが悪いのです）」

「あなたが愛想良くして、彼からほかの注文貰ってくれると、店としては助かりますけど…」
とT Tはいたずらっぽく言う。

「…そこまでいいですか…」

I YはT Tに突っ込みを入れた。

入り口のドアが開き、それを見ていたK Jはギョとする。

「こんにちは、I Y居ます？」

声の主に反応するI Y

「あら、I Mいらつしやい！」

いつにでもなく笑顔で対応した。

I Yは人気歌手I Mをカウンターの席に案内し、それを呆然と見ていたK Jに対して舌を出した。

「I Y退院おめでとー」

と言って、I MはI Yに花束を渡した。

「ありがとう―」

「ご注文は？」

T Tが伺うと

「それじゃ、白山亭オリジナルコーヒーをお願いします」

メニューを指さしてI Mが注文する。

T Tがコーヒーを淹れている間、I MはI Yに

「ねえ…傷はもういいの？」

「うん、足の貫通銃創は、痕がかなりあとまで残るそうだけど、腕の傷はすぐ消えるって」

「そうなの…ごめんね。あたしのせいで…」

「いえいえ、気にしないで、貴女が気づいて機転を利かせてくれなかったら、妹が撃たれていたらから」

「妹さんが？」

「う…ん、実家のごたごたでね、犯人の狙いは妹なの…だから私が妹の警護をすることになったの」

「あら…やだ…てっきり犯人はあたしを狙ったのかと思った」

「…違うわよ！貴女じゃないってば…もう」

「そうか！あたしてつきり、また拗れたファンが暴走したかと思ってた」

「なに？また脅迫状来たの？」

「あんたのお陰で、このところ無くなっていたけど、以前の事があるからね」

I Mはライバルの歌手や、他所の芸能事務所から妬まれていたり、拗れたファンにストーリー行為を受けることがよくあったので、I Yにちよくちよく警護依頼をしている。おかげ

で酷い被害（以前は暴行事件等があった）は受けていないが、脅迫状の類等はたまに来ていた。

「私のは、あそこに（K Jを指して）まだ居るけどね」

I Yは片目を瞑り親指で背後の入り口付近の席を指す。I Mは店内入り口の側のカウンター席に居るK Jを見てからI Yに振り向き

「だれ？」

「K Jと言ってね、港町水上警察署の人…ほぼ毎日来るの…私か貴女目当てで…もうしつっこいたらありやしない」

「うふふふ…いい男じゃない」

「そんなわけではないしょ」

「ところで、妹さんは？」

「うん…元気元気…昨日の晩もチャットで話していたわ…あの子まだスマートフォン持っていないから、あの子のパソコンとでね」

「そーなの」

「お待たせしました。白山亭オリジナルコーヒーです」

T Tが淹れた白山亭オリジナルコーヒーを飲んで

「ああ…美味しい。いつ飲んでもおいしーわ」

「でしょ！この店の創業以来のオリジナルコーヒーだから」

「そのなの？…いつから？」

「…えーと」

I Yが困っているとT Tが

「当店は、創業100年になります。その頃から、先々代オーナーの決めたレシピ通りの配合でコーヒー豆をブレンドして、オリジナルコーヒーとして淹れております」と説明した。

「…凄いですね…100年ですか」

「IY…それくらい覚えてね」

「はい」

IMは、IYの着ている女給服をまじまじと見て

「あのさ、あんたが着ているその制服着てみたいんだけど…ダメかなあ」

「どうして？」

「いや…今度ドラマで先の大戦ものやるんだけど、あたし女給喫茶の傭い店員の役でね。それにこの前のフェリーの事件（「巻き込まれ親父の突撃」参照）でIY達が着ていた女給服のレトロな所が気に入ってね」

「へえー凄いわね。じゅ…じゃなくて社長に相談してね」

IYが感心して言うと、バーカウンターに居るTTが

「…そうじゃなくて、もう…直接ここに呼んだら！」

「そうですね、TTさん」

と言って、IYはHGに連絡する。

やがてHGが身なりを正して店に入ってくる。

「IY、急ぎの用事ってなんだ？…おや、IMさんいらっしゃい」

「実は、IMが店の女給服を着たいって…」

「社長、お願いします。仕事の役作りに必要なので…お礼に今日はオフだから、女給服姿で接客しますよ」

「うーん、ま、いいか…だったら、宣伝用に写真撮らせてくれる？」

H Gの話聞いて、I Mは一瞬ためらったが、

「…ウチの事務所の社長がなんて…いや、私が説得して許可を得ます。ですからお願いします」

「いいでしょう」

「やったー」

「じゃ、こっち来て」

I YはI Mを連れて2階に上がる。

やがて女給服に着替えたI Mが

「I M入りまーす」

とI Yから教わった口癖とスカートの端を軽くつまんで会釈をして店内に入ってくる。席に居たK Jがすかさず寄ってきて

「あのう…歌手のI Mさんですね？」

「はい、そうです」

I Mが営業スマイルで答えると、

「俺…いや、わたくしあなたのファンです。是非ともサイン…いや、一緒に写真を撮らせてください」

「あら…嬉しい」

そのやり取りにI Yは「私に近づいたのは、やはりI Mに会うのが目的なのね…」とむくれた。それを見たT T

「あらあら…あの人（K J）女心が分からないのねえ…若いわー」

●B 侯爵再び

「また、あの人来てるわよ」

白山亭の女給達がひそひそと話す。噂の彼は港町水上警察署の捜査官のK J。やがてI Yが女給姿になって、「I Y入りまーす」と言ってバーカウンター横の通用口のドアを開け、スカートの端を軽くつまんで会釈をして入ってくると、早速いつもの様に他の女給達に捕まり、水とお絞りと注文伝票の乗ったトレイを渡され送り出される。I Yは仕方なくK Jの席に行き、

「いらつしやいませ。ご注文は？」

と先日の人気歌手I Mの事もあり、いつもより、より冷たく対応する。

「ああ…いつもの…」

「はあ？『いつもの』では分かりません！」

I Yの気迫に押され、

「いや…オリジナルコーヒーとミックスサンドウィッチを…」

「はい、畏まりました」

I Yはいつもよりも一層塩対応で注文を受け、カウンターに行くと「准尉、オリジナルコーヒーとミックスサンドウィッチ…」と注文を繰り返す。

「I Y、お前彼に入院中の見舞いのお礼まだ言っていないだろ？」

とバーカウンターに居るH Gの言葉にI Yは俯いた。

「…」

「ちゃんとお礼を言いなさい」

「はあい…」

I Yは不満そうに返事をする、カウンターに出てきたオリジナルコーヒーとミックスサンドウィッチをトレーに乗せ、K Jの居る席に向かった。

「お待たせいたしました、オリジナルコーヒーとミックスサンドウィッチです」

と注文の品を出すと、I Yはトレーを口の位置まで上げて、恥ずかし気に

「…この前は、お見舞いありがとうございます」

と小声で言った。それを耳にしたK J、内心嬉しいのだが聞こえないふりをして、

「何か言った？」

とわざとらしく聞き返した。K Jの言葉にI Yは「（こいつ…折角私がお礼を言ったのに―）」と、カチンときて、

「はい…この（野郎！）と言いそうになった）…この前は、お見舞いありがとうございます」と、つつけんどんに言った。それでもK Jは嬉しくなり「いや…なに…」と言って、照れた。

白山亭の前に黒にリムジンが横付けされた。I Yはそれを店内から見て眉をひそめる。

リムジンから運転手が降りてきて、後部座席のドアを開ける。それを見ていたK J「（こゝ…駐停車禁止なんだけど…）」と職業柄独り言をいう。I Yはそんなことお構いなしにリムジンを睨んでいた。

リムジンから女の子と紳士が降りる。それを見てI Yは目を見開いた。

店のドアが開き、丁度K Jの居る入り口の席に居たI Yが（仕方なく）応対に出る。折角I Yと話す機会が出来たと思ったK Jは、店に來た客に恨めしそうに見ると、K Jはハッと
する。

「姉上様――」

B Kが女給姿のI Yに無邪気に抱き着く。I Yは妹を受け止めつつも、後ろの紳士…B侯爵を睨む。

「いらつしやいませ」

K Jに應對する時よりも、威圧を込めて懇懃に應對するI Y。B侯爵は平然として、
「今日は白山亭のコーヒーを飲みに来たただの客だ：そんなに警戒しなくてよい。：とこ
ろでH G社長は居るかな？」

と言った。I Yは「畏まりました。こちらへどうぞ」と言つて、B KとB伯爵を奥の席に案内した。この間、K Jは目で追っていた。

バーカウンターからH Gが出てきて

「伯爵様、いらつしやいませ：Kお嬢様も」

H Gがにこやかに應對するが、I Yは依然警戒したまま：

「いや、この子がこれ（I Y）の職場を見たいとせがまれてね」

「そうでしたか、ご注文は？」

「あつ、准尉。私がやります」

I YはH Gを押しつける。H Gはバーカウンターに戻る。

「それでは、ご注文を」

「私は、白山亭オリジナルコーヒーを、K：お前は？」

「私も、それと父上、このケーキ頼んでいい？」

「うむ」

B伯爵が頷くと、B Kは

「では、私も白山亭オリジナルコーヒーと：あとこのケーキをお願いいたします」と注文した。

「はい、畏まりました」

I Yが答える。

「あと、君（I Y）」

「はい」

I YはB侯爵の言葉に戸惑いながらも、

「すまないがH G社長を呼んではくれないか？」

「ハイ…」

と、言われI Yは警戒気味に返事をする。

「姉上様、その制服素敵ですね。お人形さんみたい…私も着てみたいなあ…」

…白山亭の女給服はメイド服に似ていますが、どちらかと言うと、雑役女中のそれに近いです。B Kは普段B侯爵亭内で客間女中とかハウスメイド位しか見ていません…その他のメイドは居ますが、B Kの目の届く範囲に姿を表しません。ですので、逆に新鮮に見えているのです。作者注)

無邪気にI Yを褒める妹のB Kに

「ありがとうございます」

I Yはニツコリとほほ笑んだ

やがて注文のコーヒーを淹れ、I Yの案内でB侯爵の席までトレイに乗せてH G自ら給仕してから席に着く、I Yは席を離れようとしたら、

「君もそこに座りなさい」

「？はい」

I YはB侯爵に言われるままH Gの隣の席に着いた。

「実は、私からH G社長にお願いがありまして…」

「はあ…侯爵様自ら…」

H Gが畏まって言うと

「Kが社会勉強にアルバイトをしたいと言い出しまして…」

とB侯爵が話し出したのをBKが制して、

「父上…この先は私が言います。私もお嬢様女子高通いの世間知らずのままでは居られませんが。いずれ姉上様の様に社会に出て行く身の上です。つきましては、初めての社会勉強先に姉上様の働いているここで働かせてはいただけませんか？お願いしますH G社長」

H GはBK言葉にI Yを見ると、I Yは驚いて「私なにも聞いていません」と言った。

「そうですか、Kお嬢様。確かに知らない環境でいきなり社会勉強するのは不安ですね」

H Gはニコニコして、BKに言うと、

「はい」

BKは無邪気な笑顔で返す。

「それに、お父様も不安でしょう…」

と言って、H GはB侯爵を見る。B侯爵はH Gに自分の真意を見透かされたのを動揺していた。H GはBKに向き直ると

「Kお嬢様、よいお父様ですね。私は構いません…が、こちらにおられる方が何と言うでしょうか？」

とわざとらしく、I Yの方を向いてH Gは言った。話を振られたI Yはギョツとして

「わっ…私は、一向に構いません…じゅん…いえ、社長意地悪な事言わないでください」

とI Yが赤面して答えると、H Gは笑いながら

「…だそうです」

「嬉しい！ありがとうございます姉上様」

B侯爵は帰り際入り口まで送るH Gに

「…これで、いいのですか？あの時のあなたのもう一つの願い、『当店（白山亭）に足を運

んでいただき、お嬢さんの仕事ぶりを見てください』は？」

「はい、ありがとうございます。出来れば、これからも足を運んでいただき当店を御最員に
していただけるとありがたいです。I Yの警戒心が和らぐまで…」

「…成程。私はあなたの策略にハマったようですね。Kの夏休みのアルバイトもお願いする
ので、私も頻繁にここに来ようと思います。このコーヒーは色々な意味で飲みに来る理由
ができましたから」

と言つて、お互い笑った。

B 侯爵が帰った後、

「准尉…」

「ん？」

「あのですね…」

「なんだ、勿体ぶつて…Kお嬢様の事か？」

「いえ…この前のI Mの事もありますが、この制服を着た人形かフィギアを造って売り出
したら、儲かりませんかね…？」

「…うーん、そうだな…この前のフェリー事件（「巻き込まれ親父の突撃」参照）では、
地元の両県警（港町水上警察署と港町警察署）の女性警察官達や機動隊やB S A Tの女性隊
員達に好評で、非番の時とかウチで女給としてアルバイトしているしなあ…また以前から
アルバイトしてくれている姪のH Mとその看護師仲間にも好評だし…商店街会長に話して
みるか…誰かその方面に詳しい人がいないかと」

「できたら、Kにあげたいです」

嬉しそうに話すI Yに

「そうか！」

席に居たK JがH Gの元に来て

「あのおう…社長」

「何でしょう？」

「今のお方は…？I Yさんと、親し気に話していましたが…」

H Gは「（あれで親し気に見えたんだ…）」と思い、K Jを驚かそうと思って、

「あのお方はB 侯爵様と言って、彼女の父親です。それから女の子は彼女の妹です」

「准尉！この人に余計な事言わないでください！！」

I Yが珍しくH Gに怒って、どつく

「エッ？I Yさんって、高貴な生まれ？？」

「そーですよ…高貴な生まれのじやじや馬娘ですけど」

「准尉！！」

I YはH Gに怒鳴った。

「…ほら…ね」

…で、この話の顛末…

白山亭の時給服を着たミニチュアフィギアとドールを造って、白山亭のレジで土産に売り出したら、ヒットした…でも、その店内ポスターと箱に人気歌手I Mが白山亭の女給服を着ている写真をイラスト（肖像権の問題があるため）に使ったので、どちらが理由か知らんけど…（作者注）

それから、I Mと所属する芸能事務所の女性アイドルやタレント達はこぞって、白山亭の女給服を着て1日店員とかのキャンペーンをしたり、白山亭内のステージ上で、女給姿でライブをやったりしたので、その内、一般の人達が白山亭の女給服を着たいばかりに募集もし

ていないのに、アルバイトに自分を売り込んでくる女性達が殺到した。それに困ったHGは「縁故の紹介状が無い者は、アルバイト応募お断り！」と言う脅し文句をレジの後ろの壁に「白山亭の歴史」と書かれたパネルと共に張り出した。

その内、コスプレヤーの間で偽物の白山亭の女給服が出回るようになり、HGは意匠権の心配をして調べたら、ちゃっかりHGの祖母が意匠登録出願していた…しかし、登録期限ギリギリ…だったので、慌てて再度意匠登録を出しなおした。

それから、BKが夏休みのアルバイトに入り、IYと姉妹揃って白山亭で女給をした。人気歌手IMも度々BKの女給姿を見に訪れ、彼女も女給姿になり、店内で振る舞ったりしていた。

IYとBKの父親のB侯爵は、BKの送り向かいに時に（大抵は、B侯爵秘書かBK付侍女のGO）まれに白山亭でコーヒー飲んでいた…なかなか娘のIYと会う事がないが、たまにIYの居る時間にかち合うと、IY自らB侯爵に給仕に行くようになった（HGがそうしろと言ったため）。

一方、KJはすっかり委縮して、IYに対して気軽に呼びかけられなくなり、その後も白山亭に訪れるものの、ただ黙っていつもの席に座っていた。

また、過激な記事で有名な写真週刊誌は「人気歌手IMのLGBTQ疑惑その後…人気歌手IMの居る所に必ず居る謎の女性。彼女はIMの親友で、Y国際港にある老舗喫茶店である白山亭の美人女給である事が発覚…！」の記事が掲載された後、ぱったりIYの話が掲載されることはなかった…多分芸能事務所〇×エージェンシーの他にB侯爵家が抑え込んだのであろう…

●エピソード

夜中、珍しく食堂から言い争いの声が聞こえるので「(何事?)」と思いH Gは食堂に行く
と、珍しくH YとI Yがお酒を飲みながら言い争っていた。

「なんだ、こんな夜中まで…」

「あつ、准尉聞いて下さいよう…」

H Yが泣きつく

「いいえ、私の話を聞いて下さい」

I YがH Gの腕を引っ張る。

「待て待て、順番に話せ」

「実はですね…」

H YとI Yの話は、B 侯爵邸でのB Kのゴシックロリータファッション趣味で、I Yの妹
B KからI Yに送られたH YがB Kのコレクションを着た写真と、H Yが持っているF 県
領地の事件でI Yがシェリー酒に酔って倒れていたり、その後H Gに背負われている写真
(「巻き込まれ親父の撤退」参照) とを交換条件に、お互いのスマートフォンから抹消しよ
うと言う事になり、どちらが先に消すかで言い合いになったとの事。

H Gは呆れて、

「実は…こんな写真もあるんだが…」

とH Gは自分のスマートフォンでI YがB 侯爵邸で妹のゴシックロリータファッションの
服を着て妹と一緒に写っているI Yの写真を見せた…

「じゅ…准尉!ど…どつ、どうしてこの写真を…」

お酒に酔って赤らんでいたI Yの顔が見る間に蒼くなる。それを見たH Y爆笑。

「いや、Kお嬢様から『姉上様のゴシックロリータ趣味を馬鹿にするのは許せません!この

写真を見て、姉様の可愛らしさを再認識してください!』と、お怒りのメールと共に送られてきた。俺はあの時もそうだが、可愛いと思うぞIY」

「けっけっけ…消してください!」

「あー、ダメダメ」

「どうじで…」

IYが泣き顔になる。

「だって、TT達と写真共有しちゃった…」

「何ですってえー!」

IYが鬼の形相になる。HY、IYの百面相に爆笑…

すっかり弱り切ったIY、椅子に足を乗せて両手で抱えいじける…HGはHYに

「お前(HY) 笑いすぎ!」

と突っ込みを入れる。

「アハハ! だって准尉、こんなに表情豊かなIY見るの初めてだから…」

「そういえば、そうだね」

「笑わないでください…」

IYが涙目の上目遣いで訴える。HYの十八番の上目遣いの上級バージョン…それを見てさすがにIYが可哀想に思えてきたので、

「IY」

「はい」

「お前のスマートフォンにあるHYの写真な…実はKお嬢様から同じのがこっちにも送られて来てるぞ『HYおねえ様も可愛いでしょ!』って」

「「ナニー!」の間に…」

HY、IY同時に叫ぶ。

「じゅ…じゅ…、准尉！いつの間に妹と、メールアドレス交換したのですか？」

I Yが慌ててH Gに訊ねた。

「あー、H Yに渡したウェアラブルグラスな…俺のパソコンとも繋がっていてね…Kお嬢様が悪戯している時に偶然つながって、Kお嬢様と話をする事ができたんで、その時に…ね。だから安心しろ！F県領地のあの『赤ずきんちゃん作戦』の時の写真も、Kお嬢様とT達と共有しているから大丈夫！…喧嘩両成敗」

「大丈夫じゃなーい！」

「（二人ともここに来てよく笑うようになったな…）」とH Gは嬉しくなった。

「…そういう事だから…吞んで寝ろ」

「ふあーい」

暫くH Gは2人の酒の相手をして部屋に戻った。

夜中尿意をもよおしたので（親父ですから…作者笑）トイレに向かう途中でまだ明かりが点いている食堂を覗くと、H YとI Yが酔ってテーブルに伏して寝ていた。

「…やれやれ、手間のかかる娘どもだ」

と独り言を言って、H Gは二人に毛布を掛けた。

「巻き込まれ親父の子守唄 Ⅱ完Ⅱ」